同志社大学
FDハンドブック

Faculty Development Handbook

FD

Doshisha University

Foreword

FDハンドブックの作成に寄せて

学習支援・教育開発センター所長
Director, Center for Learning Support and Faculty Development

現在の日本の高等教育を巡る課題として、「教育の質保証」が浮上しています。その契機となったのは、2008年の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』の公表でしたが、それ以降も各大学が自らの教育理念と目標に基づき、学生の成長を実現する学習の場として学士課程を充実させることが強く求められています。2012年に公表された中教審答申では予測困難な時代に立ち向かい、時代を生き抜く力を学生が確実に身に付けるための大学教育改革が、学生の人生と日本の未来を確固たるものにするための根幹であり、そのために、学士課程教育の質的転換をすすめることが不可欠であるとのメッセージが公表されました。本答申では、学生の主体的な学びを確立させるための始点が、十分な学修時間の確保であり、学士課程教育の改善の責任が大学にあることを明確にしたのも新しい点でありました。

本学でも、学生が主体的に学び、十分な学修時間を授業外でも確保するための整備の一環として2013年にオープンしたのが「ラーニング・コモンズ」でした。ラーニング・コモンズでは様々な学修支援が整えられており、それらを活用することで、授業内外での学修の充実が期待されています。「学生が目的意識を持って、受け身ではなく、学びに主体的に関わり、何らかの成果につなげること」を主体的な学びとして定義すると、近年はこうした主体的な学びを促進する方法として、アクティブ・ラーニングが注目されるようになっています。そこには、「何を教えるか」から「何ができるようになるか」という、教育活動の中心目標の移行が促進され、その場合に双方向型のアクティブ・ラーニングが効果的であるという認識が共有されつつあることが背景にあるといえるでしょう。その場合、従来から実施されてきた座学中心の講義とともに、初年次教育やプロジェクト型学習、プレゼンテーション、PBL等がアクティブ・ラーニングの代表的な教授法として普及しつつあります。

実社会で直面する複雑・多様な正解が一つではない課題に適切に対応できる思考力、創造力および課題探求能力を育成するためにも、教員は、授業においては、ディスカッション、学生のプレゼンテーションによる双方向対話型の授業を展開し、学生が自ら資料や文献を探し、授業の事前・事後の学習に関わることを推奨することが求められるといえるでしょう。

また、高等教育のユニバーサル化が進行し、大学の入学者選抜が、従来のような入学者の質保証の機能を保持することは難しくなってきています。したがって、多様化した学力・学習目的をもった学生への大学の教育力が期待され、その結果としての高等教育の質保証を出口管理によって達成することが強く求められていることも最近の動向です。大学全体、各学部等でのディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーをしっかりと定めることに加えて、より具体的な学修成果を評価する、つまりアセスメントという側面が加わっていることが教育の質保証にむけての新しい側面であるといえるでしょう。

学習支援・教育開発センターでは、教育の質保証を推進するために、ラーニング・コモンズでの様々な学修支援、全学でのナンバリング実施、そして学修成果の把握のための教学IRの推進等を進めてきました。今回編纂する小冊子もそうした教育の質保証の一環としての意味を持っています。アクティブ・ラーニングを通じて学生の主体的な学びを充実させるためにも、本小冊子に掲載されている教育改善の実践例や教育方法から何らかのヒントを得て、先生がたの授業改善や教育実践にも活用していただければと願っています。

Contents

第1章　同志社大学におけるFDの基本方針

1. 同志社大学におけるFD …… 04
TOPIC／科目ナンバリングについて …… 05
2. 教育理念と同志社大学教育目標 …… 06
・建学の精神・教育理念・教育目標 …… 06
・同志社大学教育目標 …… 06
3. 同志社大学教育倫理規準 …… 07
4. 大学設置基準と本学の教育制度 …… 08
・ファカルティ・ディベロップメントの義務化 …… 08
・教育研究上の目的の公表 …… 08
・単位数設定の根拠 …… 08
・1学期15回の授業を実施しなければならない根拠 …… 09
・シラバスにおける成績評価基準等の明示 …… 09
5. 学習支援からみるファカルティ・ディベロップメント …… 10
6. 大学院教育の充実 …… 11
・TA研修会 …… 11
・大学院共通基礎科目 …… 11
7. 学生の学習状況を知る
（「キャンパスライフに関するアンケート調査」） …… 12

第2章　シラバスの整備

1. シラバスとは …… 14
・シラバスは学生と教員の契約書 …… 14
・カリキュラムの中のシラバス …… 14
・Plan-Do-Check-Action（PDCA）とシラバス …… 14
・より良いシラバスを目指して …… 15
2. シラバス記載上の注意 …… 16
・開講後のシラバスの変更 …… 16
3. シラバスの執筆と点検 …… 16
・シラバス記載上の留意事項 …… 17
4. シラバス記載例 …… 18
・神学部（講義形式） …… 18
・政策学部（演習形式） …… 20
・理工学部情報システムデザイン学科（講義形式） …… 22
・スポーツ健康科学部（講義形式） …… 24
・グローバル・コミュニケーション学部（外国語） …… 26
TOPIC／シラバス整備について …… 28

第3章　さまざまな授業形態

1. 学生の学びを引き出すための授業形態 …… 30
・大講義 …… 30
・演習 …… 31
・サービス・ラーニング …… 31
・PBL（Project Based Learning） …… 32
・インターンシップ …… 32
TOPIC／本学教員の授業の様子が知りたい …… 33
2. 授業の創意工夫 …… 35
・事例1　授業での英語の取り入れ方
社会学部教育文化学科
William R. Stevenson III …… 35
・事例2　日本人学生と留学生との「学び合い」
政策学部　岡田彩 …… 36
・事例3　授業でのグループワークの取り入れ方
文化情報学部　宿久洋 …… 38
TOPIC／教育活動支援制度 …… 40

第4章　試験、成績評価、フィードバック

1. 学習到達度の測定 …… 42
2. テストを作成する際の留意点 …… 43
・教場試験 …… 43
・レポート課題 …… 43
3. 成績評価の基本原則 …… 44
4. 厳格な成績評価 …… 45
5. 学生による授業評価アンケートの活用 …… 46
TOPIC／教学IRについて …… 46
6. 科目担当者による授業講評 …… 47
7. クレーム・コミッティ制度 …… 48
図書資料のご案内 …… 49

刊行物のご案内 …… 56
・学習支援・教育開発センター年報 …… 56
・CLF report …… 56

01 同志社大学における FDの基本方針

1.同志社大学におけるFD

TOPIC／科目ナンバリングについて

2.教育理念と同志社大学教育目標

・建学の精神・教育理念・教育目標
・同志社大学教育目標

3.同志社大学教育倫理規準

4.大学設置基準と本学の教育制度

・ファカルティ・ディベロップメントの義務化
・教育研究上の目的の公表
・単位数設定の根拠
・1学期15回の授業を実施しなければならない根拠
・シラバスにおける成績評価基準等の明示

5.学習支援からみる ファカルティ・ディベロップメント

6.大学院教育の充実

・TA研修会
・大学院共通基礎科目

7.学生の学習状況を知る

（「キャンパスライフに関するアンケート調査」）

1. 同志社大学におけるFD

同志社大学におけるFDの定義

同志社大学におけるFDは、「建学の精神と教育理念に基づき、同志社大学教育目標および学部・研究科・センターが掲げる教育理念・目標を達成するために、教員と職員が学生一人ひとりの成長に向けて協働し、本学の教育の充実と向上を目指して組織的に取り組む全ての活動」と定義しています。

同志社大学は、「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」という3つの教育理念を掲げ、良心を手腕に知識・能力を運用し、社会に貢献する人物の育成を目指しています。これらの教育理念を根幹におき、各学部がそれぞれの専門性に則って構築したものが、学部・学科カリキュラムであり、卒業の際に学士号の資格を取得するにふさわしい教育内容が、学部・学科カリキュラムに盛り込まれています。本学の場合は各学部・学科の独立性が高く、カリキュラムの内容は、学部・学科によってかなりの多様性を見せています。しかし、全学共通教養教育センターや免許資格課程センターの統括する科目は、学部横断型の授業になっていますし、副専攻制度を設けている学科も少なくありません。各学部・学科の専門性を基盤とした縦軸のカリキュラムと、学部・学科横断型による横軸のカリキュラムが、大学のなかに走っています。

各学部・学科の構築したカリキュラムを実現していくために、いわばその核となるのが、個々の科目です。教える側の教員は、まずカリキュラム全体における各科目の位置づけを把握していなければなりません。学部・学科のカリキュラム実現のなかで、それぞれの科目がどのような目的をもって設置されているのか、学生たちが既に履修している科目との連続性や、これから履修する科目への接続ということも、意識しておかなくてはならないでしょう。下級生用の科目と上級生用の科目では内容やレベルが異なることは当然ですし、学年が混在している科目の場合は、教材や授業内容に工夫が必要です。

学部・学科カリキュラムにおける個々の科目の位置づけがわかれば、次に考えなくてはいけないのは担当する科目の授業計画（シラバス）です。受講生に、授業の目標、進度の目安、毎回の授業への準備や復習、更には成績評価基準を明示しておくことが大切です。受講する学生の側からすると、毎回の授業で何を勉強するのか、予習としてどのようなことをしておけばよいのかを、予め示しておいてもらうと安心して授業が受けられます。また、成績評価の基準も事前に示しておいてもらえば、少しでも良い成績を取れるように努力することができます。ともすれば大学での教育は、教える側からの一方通行になりがちですが、常に、授業を受ける側に立って、自分の担当する授業を見直していくことが重要でしょう。

期末には、それぞれの教員が担当した受講生の成績評価をしなければなりません。本学は2004年度からGPA制度を導入しており、これは学生の成績を明瞭かつ正確なものにすると同時に、留学生の増加を念頭に、できるだけ国際的にも通用しやすい評価基準を取り入れようとしたものです。GPAの導入とほぼ同時期に開始した科目履修者の成績分布のインターネット公表は、様々な意味で大きな影響力があったと思われます。もとより、大学における成績は教員の裁量に任されていて、成績をどのようにつけるかについて、一定の基準は存在していませ

ん。しかし、学生側からすれば、自分の成績が良いのか悪いのか客観的に判りづらく、教員側からしても、果たして自分のつけた成績は厳しいのか甘いのか、具体的に把握できないというのが実状でした。成績分布の公表により、学生は自分の成績を相対的に知ることができるようになり、教員は自分の担当した授業の成績分布を他の教員の成績分布と簡単に比較することが可能となって、各教員が客観的に自分の成績評価を見直す契機となりました。もちろん大学の場合、様々な種類の授業があり、受講生の構成にばらつきがあることから、相対評価を導入することは不適切と思われます。しかし、成績分布を公開するようになってからは、教員間に自主的に自分の評価を見直す動きが広がり、過去に実施したアンケートでも、45%の教員が何らかの形で「成績評価基準を変えた」と回答しています。

教育という現場が人と人との交わりから生まれることを考えれば、授業を教えた側の印象と授業を受けた側の感想も、教育の効果を測るうえで大切です。本学では、成績評価を終えた教員が採点結果を踏まえて、どのように受講生の到達度を判断しているかを示すことができる授業講評がネット上に公開されています。また、授業を履修した学生が、担当者の授業を受けた感想を伝えることができる学生アンケートも実施されています。お互いの反応を知ることにより、次年度の授業展開への改善点が見えてくることは言うまでもありません。教える側と教えられる側が授業方法について互いに語り合うことができるような、相互のコミュニケーションの場を創出しようという努力は、これからも大学教育の場で益々重要になってくるでしょう。

本学には、学生たちに少しでも質の高い教育を提供し続けることができるように、学習支援・教育開発センターが設置されています。センターでは国内の大学はもちろん、全世界の大学で進められている教育方法を精査し、そこから先進的な取り組みを紹介できるよう努力しています。教職員が一丸となり、学生と活発なコミュニケーションを交わしながら構築していける、理想の同志社教育の実現を目指しています。

TOPIC

科目ナンバリングについて

科目ナンバリング

本学では、2015年度より、科目ナンバリング制度を開始しました。科目ナンバリング制度は、欧米の大学では以前から取り入れられていましたが、授業科目に学問分野や科目水準、位置付けが明確になるように番号を付与したものです。教員が、カリキュラム全体を見渡して、各授業を体系化していく際に、授業内容の類似性や偏りなどを見つけ出し、カリキュラム全体の継続的な見直しが図れる効果があると期待されています。

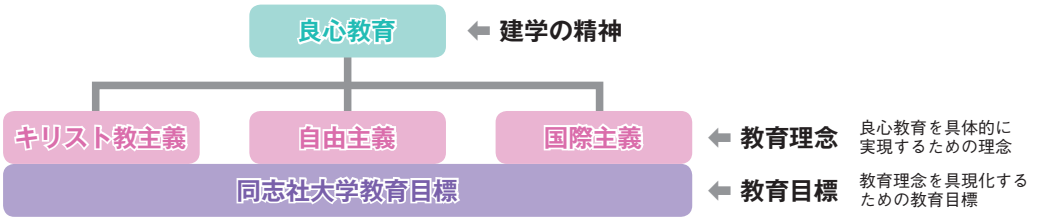
一方で、学生にとっては、カリキュラムの体系性が分かりやすくなるほか、留学先の大学で授業を登録履修する際の本学設置科目との単位互換の目安としても利用することができます。

●学習支援・教育開発センターホームページ【科目ナンバリング】
http://clf.doshisha.ac.jp/numbering/numbering.html

2. 教育理念と同志社大学教育目標

同志社大学の建学の精神は、良心を手腕に知識、能力を運用し、社会に貢献する人物の育成を目指す「良心教育」に基づいています。その「良心教育」を実現するため、本学では「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」の3つを創設時から教育理念として掲げてきました。そして、それら3つの理念を教育の面から具現化するため、本学の教育を通して育成すべき人物像を明文化したものが、同志社大学教育目標です。

建学の精神・教育理念・教育目標



同志社大学教育目標

●高い倫理観と豊かな人間性の育成

同志社大学は、高い倫理観と幅広い教養をそなえた、品格ある人物を育成する。

●自治自立の精神と行動力の育成

同志社大学は、批判的・科学的思考力をもって、自ら問題を発見、解決できる自立した人物を育成する。

●生涯を通じて社会に貢献する精神と行動力の育成

同志社大学は、生涯を通じて真理を探究する精神をそなえ、積極的に市民社会に貢献できる人物を育成する。

●国際社会に対応できる語学力と行動力の育成

同志社大学は、優れた外国語運用能力をもって、国際社会で広く活躍できる人物を育成する。

●寛容な精神の育成

同志社大学は、多様な価値観を受容し、世界の平和に貢献できる人物を育成する。

参考URL

●建学の精神と新島襄
http://www.doshisha.ac.jp/information/history/neesima/neesima.html
●良心教育と教育理念
http://www.doshisha.ac.jp/information/history/educational_ideal.html
●同志社大学教育目標と学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針
http://www.doshisha.ac.jp/information/overview/educational_goal.html

3. 同志社大学教育倫理規準

同志社大学では、教育の質の向上を目指す活動の一環として、教育活動に関する行動規範を「同志社大学教育倫理規準」に定めています。

本学の専任教員はもちろんのこと、非常勤嘱託講師、職員等、本学における教育に携わる者すべては、この規準に則り、教育活動に従事することが求められています。

同志社大学教育倫理規準

2006年5月27日制定
2007年6月30日改正
2015年3月20日改正

前文

同志社大学は、大学教育を取り巻く環境が変化する中でも、本学の教育的使命を不断に果たし続けることを目的として、「同志社大学教育倫理規準」を定める。

（建学の精神と教育理念）

第１条　本学は、良心教育を掲げる建学の精神を継承し、キリスト教主義、自由主義及び国際主義という教育理念を教職員及び学生に進んで伝えることによって、その教育的使命の遂行に努める。

（教育活動に対する自覚）

第２条　教員は、教育活動に対して、専門家としての自覚を持つ。

２　教員は、教育方法、内容等の不断の点検と向上を図る。

３　教員は、適正な授業運営と公明な成績評価を行う。

４　職員は、本学が行う教育活動の支援に尽力する。

５　教職員は、教育に携わる職業人にふさわしい言動を心がける。

６　本学は、その教育活動の円滑な運営を組織的に支援する。

（学生の人格と人権の尊重）

第３条　教職員は、学生の人格と人権を尊重する。また、本学は、学生の人格と人権が尊重されるために、然るべき措置を講ずる。

（教育活動に関する説明責任）

第４条　本学は、学生、利害関係者及び第三者に対して、その教育活動が適切に行われていることを必要に応じて説明する責任を負う。

（事務）

第５条　この規準に関する事務は、倫理審査室事務室が取り扱う。

（改廃）

第６条　この規準の改廃は、倫理審査委員会及び部長会の審議を経て、学長が決定する。

附　則

この規準は、2015年4月1日から施行する。

4. 大学設置基準と本学の教育制度

同志社大学における教育活動は、全て「同志社大学学則」、「同志社大学大学院学則」、「同志社大学専門職大学院学則」、「同志社大学法科大学院学則」に基づいて行われています。

また、これらの学内諸規程類は、「学校教育法」、「学校教育法施行規則」、「大学設置基準」、「大学院設置基準」、「専門職大学院設置基準」等、国の法令に準拠して定められています。

ここでは、国の法令の中でも、大学における教育活動の水準を維持することを目的に定められた文部科学省令である「大学設置基準」と、本学の教育制度の関係について説明します。

ファカルティ・ディベロップメントの義務化

第25条の3　大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

本学では、全学的な教育施策の企画・開発、ならびに教育活動の継続的な改善の推進と支援を行うことにより、本学における大学教育の充実と発展に寄与することを目的として学習支援・教育開発センターを設置しています。学習支援・教育開発センターは、各学部・研究科・センターに設置されたFD委員会と連携し、日常的に教育内容と教育方法を点検するとともに、教育改善の施策を検討し、その維持・向上を図っています。

教育研究上の目的の公表

第2条　大学は、学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定めるものとする。

本学では、学部は学科単位で、研究科は専攻単位で、人材養成目的と教育研究上の目的を定め、「学則」、「大学院学則」、「専門職大学院学則」、「法科大学院学則」に記載して、これを公表しています。

単位数設定の根拠

第21条　各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2　前項の単位数を定めるに当たっては、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

一　講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする。

二　実験、実習及び実技については、30時間から45時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもって1単位とすることができる。

三　一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち2以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前二号に規定する基準を考慮して大学が定める時間の授業をもって1単位とする。

3　前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。

本学の学則では、各授業科目の単位数設定基準を明確に規定していませんが、ほとんどの授業科目においては、講義・演習科目は授業15時間で1単位、実験・実習・実技科目は授業30時間で1単位と計算しています。なお、多くの大学と同様、本学でも1コマ90分間の授業を2時間とカウントしています。1学期に15回授業を行う講義科目であれば、30時間授業を行うことになりますので、2単位を付与します。ここで注意が必要なのは、大学設置基準では、第21条第2項で、「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準」と定めていることです。つまり、2単位を付与するためには、90時間の学修が要求されることになり、30時間の授業時間との差である60時間分の授業時間外学修が必要となります。このため、シラバスにも授業時間外に要求する学修内容を記載することにしています。

1学期15回の授業を実施しなければならない根拠

第22条　1年間の授業を行う期間は、定期試験等の期間を含め、35週にわたることを原則とする。
第23条　各授業科目の授業は、10週又は15週にわたる期間を単位として行うものとする。ただし、教育上必要があり、かつ、十分な教育効果をあげることができると認められる場合は、この限りでない。

本学では、1学期間に15回の授業を実施しています。これは、大学設置基準第23条に授業期間が定められているからです。同条では、10週にわたる期間を単位として授業を行うことも認められていますが、これは3学期制を採った場合のことであり、本学のように春・秋2学期制を採っている場合は、15週にわたって授業を行う必要があります。なお、15回の授業に定期試験を含めることはできません。これは、大学設置基準第22条に、定期試験期間を含めた授業期間が35週にわたると規定されていることから明らかな通り、春学期・秋学期各15週、合計30週の授業期間と、5週の定期試験期間で構成されると解釈されるからです。

シラバスにおける成績評価基準等の明示

第25条の2　大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに1年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。
2　大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

本学では、大学設置基準の規定に従い、授業開始前に学生に公開するシラバスに、各回の授業計画とともに成績評価基準を記載することにしています。また、原則として、シラバスに記載した授業計画に即して授業を行うと同時に、厳格に成績評価を行う必要があります。

5. 学習支援からみるファカルティ・ディベロップメント

本学では、2013年4月に良心館ラーニング・コモンズを開設しました。総面積2,550㎡を誇る学習空間ですが、その特徴のひとつに、教室棟の中心部に設置されている点が挙げられます。これは、アクティブ・ラーニングを実践する場として、学生・教員双方にとって身近な存在として機能することを企図して設置されたためです。学習環境・空間の変化が、学生の学び方や教員の授業の進め方、課題の出し方にも変化をもたらすことで、学習成果の向上への波及が期待されています。

しかし、学習環境・空間に変化を与えるためには、ハード面の整備だけでは足りません。各種プログラムやセミナーなどソフト面の充実にも同時に取り組む必要があるでしょう。具体的な事例として、良心館ラーニング・コモンズでは、アカデミック・インストラクターと呼ばれる教員やラーニング・アシスタント（LA）と呼ばれる大学院生スタッフが、「アカデミックスキルセミナー」や「学習相談」といった学習支援サービスを提供しています。初年次教育から卒業論文の執筆に至るまでの4年間のうちに、こうしたセミナーや学習相談を活用することで、学生の学習機会の充実に繋げるきっかけになると考えています。一方で、アカデミックスキルセミナーは、学生に対して基礎的な学習スキルをどう教えたらよいか悩んでいる教員にとっても参考になるかもしれません。基礎的なスキルほど、いざ、それを教えるとなると苦労をしたという経験を持つ教員も少なからずいるのではないでしょうか。こうしたセミナーを活用して、改めて基礎的な学習スキルについて整理することで、担当科目の運営にも活かすヒントがあるかもしれません。

良心館ラーニング・コモンズの開設以来、すでに数年が経ち、色々と次の展望も見えてきました。その一つが、学部との連携協同モデルの構築です。すでに試行実施していますが、授業外学習を促す取り組みとして、教員がアカデミックスキルセミナー等への参加を促し、学生が受講証明書とレポートを提出することで正課科目に加点措置を受けられるといった学部の取り組みも出てきています。これは一例にすぎませんが、こうした取組みが全学的に広がり、多くの学部と色々な形で連携協同モデルを構築することで、学習支援を起点としたファカルティ・ディベロップメントの一層の浸透に繋がっていくものと期待しています。

【アカデミックスキルセミナー（例）】

No.	セミナー名	概要
1	学術文献の読み方	自らの課題、テーマを念頭に、どう文献を読み進めればよいのかをミニレクチャーと実習を通して学ぶ。
2	アイデアの拡張法	マインドマップと検索エンジンを使い、レポート・論文作成に役立つアイデア出しの方法を学ぶ。
3	伝わる文章の書き方	どうすれば伝わる文章が書けるか、ミニレクチャーと実習を通して学ぶ。
4	プレゼンの構成法	伝わるプレゼンの作り方・話し方等、事例を元にして学ぶ。
5	グループでのアイデア出し	グループで多くのアイデアを出す方法、またそれらの絞り方についてレクチャーと実習を通して学ぶ。（受講者が3名以上必要）
6	ソーシャルメディアの学術的利用法	SNSなどのツールを用いてウェブ上の情報を半自動的に収集する方法を学ぶ。
7	レポートの構成法	テーマ設定のコツから構成の立て方など、レポート作成の基本を学ぶ。

No.	セミナー名	概要
8	ノートの取り方	聴きながらとる、読みながらとる。高校までとは違う、大学でのノートの取り方、まとめ方のコツを学ぶ。
9	ポスターの作り方	身近なツールを利用し、ポスター発表等で必要となるコツや技をサンプルを交えて学ぶ。
10	レジュメの作り方	授業やゼミの発表に欠かせないレジュメ。レジュメ作成のポイントを、ミニレクチャーと実習を通して学ぶ。
11	引用の方法	なぜ引用するのか、どのような引用形式があるのか。「コピペ」と言われないレポートのルールを学ぶ。
12	ラーニング・コモンズ活用法	ラーニング・コモンズをフィールドとして、参加者の目線で活用法を考えるワークショップを行う。
13	情報探索の方法	調べ方の見当もつかないものをどう調べるか。その情報をどのように使用するか。大学で本当に必要な情報探索法を学ぶ。
14	図・表の見方・作り方	グラフの意味や適切な使い方について説明する。図表内の数値の見方、作図・作表の方法を学ぶ。
15	メールの書き方	教員に送る、調査先にアポイントメントをとる。その際、失礼にならない電子メールの書き方を学ぶ。

参考URL

●良心館ラーニング･コモンズホームページ
http://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/

6. 大学院教育の充実

TA研修会

本学のTA制度は、成績優秀な大学院学生に教育経験を積む機会を提供することによって、教員・研究者・専門職業人等としての自立を奨励することを目的としています。

学習支援・教育開発センターでは、2011年度以降、新たにTAを務める大学院生（予定者を含む）を対象として、TA制度の定義・目的、業務内容、心得、事務手続き、TA経験のある若手教員による体験談等について説明する研修会を毎年実施しています。本研修会は、本学教職員も参加可能であり、TAを任用する教員にも役立つ内容となっています。

大学院共通基礎科目

学習支援・教育開発センター大学院教育検討部会では、2014年度に全学の大学院生を対象として、「キャリアビジョンに関するアンケート調査」を実施しました。多くの大学院生が将来のキャリア形成に役立つ大学院共通基礎科目の開講を希望しているとの結果を受けて、2015年度からは他研究科の大学院生も受講可能な科目として、「大学院共通基礎科目」を試行実施しています。

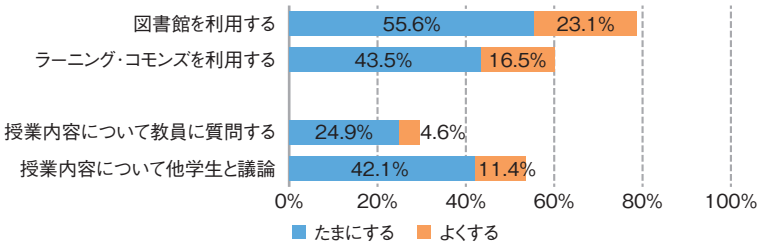
参考URL

●学習支援･教育開発センターホームページ【TA研修会】
http://clf.doshisha.ac.jp/ta/ta.html

7. 学生の学習状況を知る
（「キャンパスライフに関するアンケート調査」）

同志社大学学習支援・教育開発センターは、学生の学習状況を知るため、「キャンパスライフに関するアンケート調査」を実施しています。この調査は、1年次および3年次終了時点の全学生を対象とし、入学後の学習状況や教育に対する意見を回答してもらうことで、教職員が学生の実態を把握し、本学の教育改善につなげることを目的としています。

具体的な分析例として、『1年次生の学習行動（2014年度調査から）』をみてみましょう。これによると、1年次生の60%が「ラーニング・コモンズを利用する」こと、53.5%が「授業内容について他学生と議論する」こと等がわかります（ともに、「たまにする」＋「よくする」の合計）。



図：1年次生の学習行動

もちろん、ここで示した学習行動の頻度が高い学生ほど、学習成果（GPAなど）は高い傾向にあります。ただし、学生の学習成果は、学習にむかう意欲だけで測れるものではありません。なぜなら、同じ同志社大学へ入学したとしても、学生はそれぞれ、異なる選抜方法で入学しており、高校までの学力にいくらか差があることは容易に予測され、その差が大学の学習成果に影響するかもしれないからです。また、多くの学生の生活は学習行動だけでなく、部活動・サークル活動と両立しながら過ごしており、それらへの参加の有無も、学習成果に影響するおそれがあります。こうした学生の状況を踏まえれば、学習行動と学習成果の関連を単純に検討するだけでなく、その関連に、選抜方法の違いや部活動・サークル活動への参加の有無が、どのように関わっているのかを捉え、検討しなければなりません。このように、「キャンパスライフに関するアンケート調査」を活用することで、さまざまな角度からエビデンスに基づいた分析をすることが可能となり、各学部等が教育改善に取り組む際の有益なデータとして活用されることが期待されます。

本調査の集計結果は、全専任教員に「中間報告書」、各学部・センターに「調査結果報告書」として配布しています。また、学習支援・教育開発センターのHPでも一部の集計結果を公開しています。これらの報告書は、学部ごとの集計結果も示しているほか、アンケート結果を使って、以下のようなテーマ分析も行っています。

・「選抜方法と学業成績」（2012年度）
・「部活・サークルと学業成績の関連」（2013年度）
・「学習環境の利用と論理的思考の向上感との関連―学生の学習習慣に注目して」（2014年度）

当然ながら、こうした調査を実施したからといって、それがすぐに教育改善に結びつくとは限りません。しかし、計量データを分析する視点から、学生の状況を捉える重要な一資料を提供することはできます。こうした資料が、本学の教育について考える大きなヒントとなっています。

参考URL

●キャンパスライフに関するアンケート調査
http://clf.doshisha.ac.jp/investigation/investigation.html

02 シラバスの整備

1.シラバスとは

・シラバスは学生と教員の契約書
・カリキュラムの中のシラバス
・Plan-Do-Check-Action（PDCA）とシラバス
・より良いシラバスを目指して

2.シラバス記載上の注意

・開講後のシラバスの変更

3.シラバスの執筆と点検

・シラバス記載上の留意事項

4.シラバス記載例

・神学部（講義形式）
・政策学部（演習形式）
・理工学部情報システムデザイン学科（講義形式）
・スポーツ健康科学部（講義形式）
・グローバル・コミュニケーション学部（外国語）
TOPIC／シラバス整備について

1. シラバスとは

シラバスは学生と教員の契約書

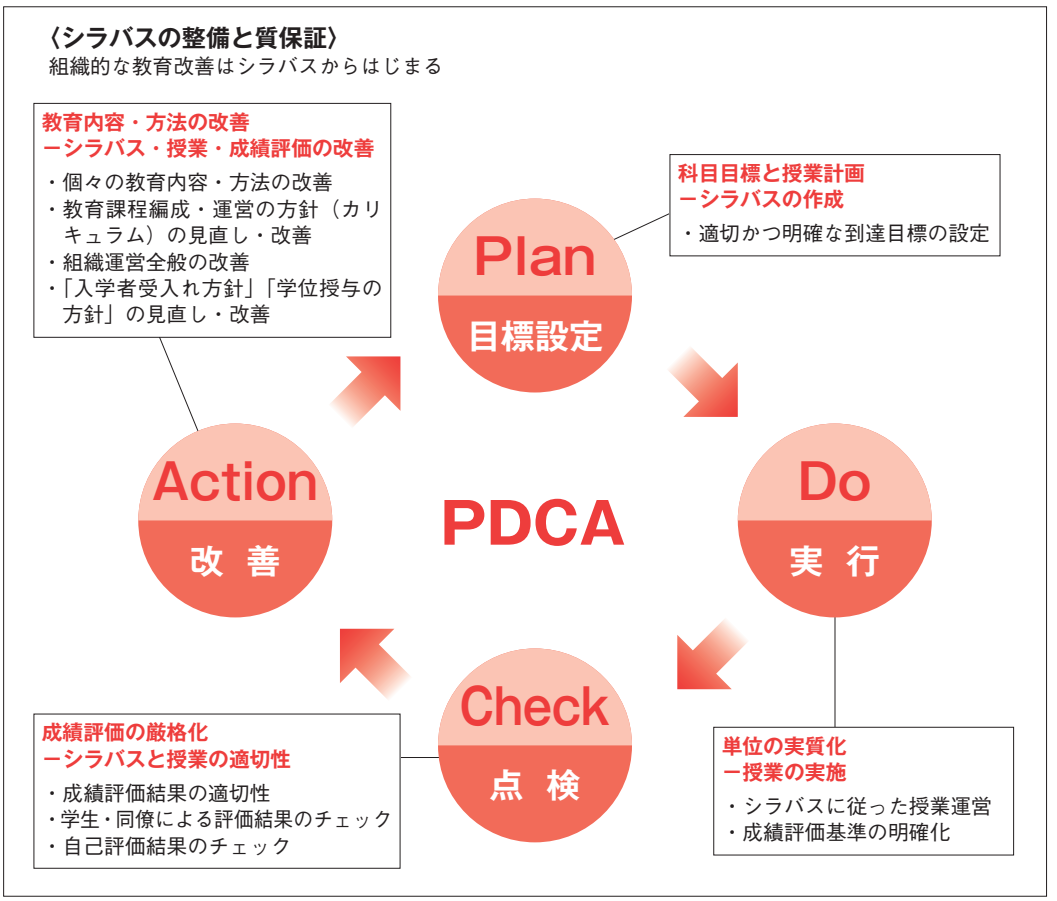
シラバスは講義の方針や学習計画を学生に周知させる目的で作成されるものです。我が国の大学で用いられるシラバスは米国で慣用される形式が一般的で、講義の目的、講義の対象者、開講学期・期間、使用教材、到達目標、予習と復習をすべき事柄、成績評価方法とその基準、教員との連絡方法、そして毎回の授業計画など、学生が講義を受けて単位を取得するために必要な情報がほぼ含まれています。学生はこのようなシラバスを参考にして、履修科目登録時に科目選択を行ない、受講することになります。つまり、シラバスは受講する側の学生にとって不可欠なものであり、講義する側の教員との契約書とも言えるでしょう。契約書である以上、学生と教員の双方が「契約」に従う義務も生じます。お互いがこの義務を果たすことによって、学生は受講に際して準備すべき事柄や評価の基準をあらかじめ理解することができ、教員にとっては、綿密に作成されたシラバスは授業計画に狂いが生じることなく、到達基準や成績評価の明確化は履修判定を容易にしてくれるというメリットも生まれてきます。

カリキュラムの中のシラバス

大学で行なわれる個々の講義は大きな学問体系の枠組みとしてのカリキュラムの中に位置づけられています。そのため、自分の担当する科目と他の科目との関係に配慮し、科目間の縦糸と横糸を紡ぐこと（科目ヒエラルキー）をも意識して作成するべきでしょう。自己完結型シラバスは学問体系から逸脱することになりかねません。

Plan ・ Do ・ Check ・ Action（PDCA）とシラバス

シラバスは説明責任を果たす公文書の一つとして捉えられますが、そこにはPDCAサイクルが盛り込まれています。すなわち、科目目標と適切な授業計画などは①Plan（目標設定）であり、②Do（実行）は単位の実質化（シラバスに従った授業運営、成績評価基準の明確化）、③Check（点検）は成績評価の厳格化（学生や担当者自身、同僚による評価結果のチェック）、そして④Action（改善）では、個々の教育内容・方法の改善と教育課程編成（カリキュラムの中のシラバス）や組織運営全般の改善などを行ないます。PDCAサイクルを継続的に行なうことで、入口（入学者受入れ方針）と出口（学位授与）の改善も視野に入ってきます。



より良いシラバスを目指して

かつて大学の講義は、教授する側の一方通行で終わる形式が少なからずみられました。しかし、大学設置基準の大綱化以降、シラバスの整備をはじめとする学生と教員の双方向授業が重視され、現代のシラバスは、学生サービスのための便宜ではなく、学生と教員の双方が講義に責任をもつことを促しています。このことは、「学生の思い込み」や「教員の独善」を修正してくれることにも繋がっていきます。授業の過程でこのような事態が起これば、それを改めていくことも必要で、場合によっては、学生の了解を得て授業計画も思い切って変更せざるを得ないこともあるでしょう。また、問題点が明らかになれば次年度のシラバスを改訂しなくてはなりません（PDCA サイクル）。学生と教員が共により良いシラバスを作り出していくと言えるでしょう。

2. シラバス記載上の注意

シラバスの記載にあたっては、学生がその講義の全体像を把握できると共に、毎回の授業の内容、成績評価の基準などをなるべく具体的に理解できるようにすることをねらいとして作成することが求められます。本学では、全学的なシラバスの整備を目的として、シラバスに関するガイドラインを定めています。以下においては、ガイドライン（P.28参照）に基づき、シラバスにおける必須記載事項である、その講義の「概要」、「到達目標」、「授業計画」、「授業時間外の学習」、「成績評価基準」、「評価のポイント」を中心にシラバス作成の際に留意すべき主な点をみていきましょう。

開講後のシラバスの変更

シラバスの記載事項は、原則として開講後に変更することはできません。

・概要　・到達目標　・成績評価	・授業計画　・参考文献 ・テキスト　・参照URL
↓	↓
変更は認められません	授業を進めていく中で、どうしても変更しなければならない場合、受講生と相談の上、若干の変更をすることは可能です

変更した場合、ホームページ上のシラバスの変更及び教室で紙媒体によるシラバス変更を配付することによって、必ず学生に周知してください。科目によって授業計画の変更が予測されるようなときには、あらかじめ最初のシラバス作成の際にその旨をコメント欄に記載しておくとよいでしょう。

3. シラバスの執筆と点検

各教員より提出されたシラバス原稿は、シラバス整備のガイドラインに基づき、各学部・研究科・センターのFD委員会において点検します。右記「シラバス記載上の留意事項」に照らして不備や欠落が認められる場合は、修正を依頼する場合がありますのでご留意ください。

シラバスの具体的な書き方は、授業形態（講義／演習／外国語／その他）や学問分野などによって一定の相違があるべきものと思います。P.18からは、シラバス記載例を提示していますが、あくまでもひとつの参考としてご参照ください。

参考URL

●シラバスWEB検索
https://syllabus.doshisha.ac.jp/

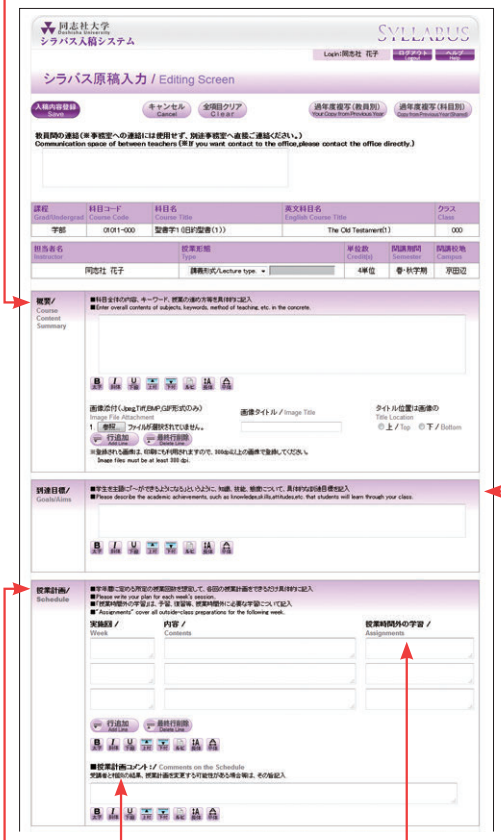
シラバス記載上の留意事項

概要
講義全体の内容、ねらい、キーワード、授業の進め方などを示すものです。できるかぎり簡潔に分かりやすく記載することが求められます。

到達目標
その講義を通して学生が習得することを期待される知識、技能、態度などを具体的に示すものです。「～ができるようになる」、「～を理解する」、「～を習得する」などの表現を用いて、目標を個別に列挙するといいでしょう。

成績評価基準
成績の評価項目（試験、レポート、出席点など）を明示します。複数の評価項目を用いることを前提として、それぞれの項目が最終的な成績に対して占める割合（点数配分）を「%」で表記してください。

評価のポイント
各評価項目において、具体的にどういうことが評価のポイントとなるかを、分かりやすく具体的に記載することが求められます。



授業計画コメント
授業計画を変更する可能性がある場合は、必ず記載してください。

授業計画
学年暦に定められた授業回数を想定し、毎回の授業内容のテーマや内容など、授業の予定を記載します。できるかぎり具体的に記載することが求められます。

授業時間外の学習
毎回の授業に対応するかたちで学生に求められる予習・復習など、授業時間外に必要な学習について、できるかぎり具体的に15回分記載することが求められます。

テキスト・参考文献
著作者、タイトル、出版元、出版年を必ず記載してください。「コメント」欄には、該当テキスト・参考文献に関するコメントを、「テキストコメント」、「参考文献コメント」欄には、複数のテキスト・参考文献全般に関するコメントを記載してください。

参照URL
授業の中でホームページを参照する場合は、アドレスを明示してください。

備考
補足説明のある場合は記載してください。

4. シラバス記載例

神学部（講義形式）

科目名：近世キリスト教史1（ドイツの宗教改革）
担当者：村上みか

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
03141	○近世キリスト教史1 （ドイツの宗教改革）	2単位	春学期	今出川	講義形式

概要

宗教改革はキリスト教史においてとりわけ大きな意味をもつ。しかし，その理解については，これまで必ずしも明確で一致したものが提出されてきた訳ではない。プロテスタント教会にとって宗教改革は「福音の再発見」という神学史上，極めて意義のある出来事であったし，他方，カトリック教会は，「教会分裂」の原因としての否定的な宗教改革理解を長らく示してきた。このような独自の教会理解に規定された解釈を克服し，より本質的な理解に近付くために，本講では宗教改革を歴史的文脈の中に位置付け，相対的に把える視点を提示する。具体的には，ルターの「95ヶ条の提題」に端を発する宗教改革が，当時の教会内外の様々な要因に支えられて大きな教会改革運動へと展開する様子を明らかにする。すなわち，当時の教会状況，政治，経済，社会状況，また思想状況との関連で，宗教改革が成立し，展開してゆく過程を追い，同時にルターの神学が周囲との様々な議論を通じて展開していく様子を把える。このような考察を通じてプロテスタント教会の神学と教会形成の基礎を理解し，同時にそれが歴史的に規定されたものであったことを学ぶ。

到達目標

①中世末期から宗教改革期に至る中央ヨーロッパの歴史を，政治，経済，社会，教会という多様な側面から理解することができるようになる。
②宗教改革の成立と展開について，歴史的に考察する力を身につける。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	授業概要の説明	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
2	＜宗教改革前史＞ 中世末期のヨーロッパ（1）政治，経済	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
3	中世末期のヨーロッパ（2）社会	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
4	中世末期のヨーロッパ（3）人文主義	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
5	中世末期のヨーロッパ（4）ローマ教会，教会内外の敬虔運動	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
6	中世末期のヨーロッパ（5）神学	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
7	＜宗教改革の成立と展開＞ ルター：信仰の歩み	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
8	ルター：神学の形成	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。

9	「95ヶ条の提題」と贖宥論争	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
10	ローマ教会の対応と神学論争の発展	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
11	社会の反響と改革運動の拡大（1）ルターの支持者たち	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
12	社会の反響と改革運動の拡大（2）運動拡大のプロセス	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
13	改革運動内部の神学論争（1）律法と福音，聖餐論	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。またレポート作成の準備をする。
14	改革運動内部の神学論争（2）自由意志論と奴隷意志論	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。またレポート作成の準備をする。
15	まとめ	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。またレポート作成の準備をする。

授業計画コメント

成績評価

平常点（出席，議論への参加）	30%	出席率と授業時の議論への参加について評価を行う。
期末レポート試験	70%	問題を歴史的文脈の中で考察し，それを独自の言葉で表現できているかを評価のポイントとする。

テキスト

授業時に適宜，配布する。

参考文献

A. E. マクグラス（高柳俊一訳）『宗教改革の思想』初版（教文館，2000年）
金子晴勇，江口再起　共編『ルターを学ぶ人のために』初版（世界思想社，2008年）

参照URL

備考

政策学部（演習形式）

科目名：演習I-14（世界経済・金融の身近な問題を考える）
担当者：根岸祥子

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
70101-014	△演習I-14 （世界経済・金融の身近な問題を考える）	2単位	秋学期	今出川	ゼミ形式

概要

世界で起きている経済・金融や開発援助に関する諸問題をさまざまな角度から検討する。文献の輪読を通じて国際金融の基礎知識を身に付けながら，エクセル等を使った情報処理の基礎演習を行う。その後，身に付けた知識を実際の問題に結び付けられるよう，身近な経済・金融のテーマについてディベートを行う。その他，学外活動等も通じて，国際金融という分野を学ぶスタート地点としてもらいたい。

到達目標

演習Ⅱ－14においては，世界経済・金融に関する映像を見てディスカッションし，英語文献を読んで発表を行なうので，そのための基礎知識をしっかりと身に付けることを目標としている。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	イントロダクション	各自発表準備
2	情報処理演習	グループ発表準備と各自予習
3	テキストまとめとディスカッション（1）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
4	テキストまとめとディスカッション（2）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
5	テキストまとめとディスカッション（3）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
6	テキストまとめとディスカッション（4）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
7	テキストまとめとディスカッション（5）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
8	テキストまとめとディスカッション（6）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
9	テキストまとめとディスカッション（7）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
10	テキストまとめとディスカッション（8）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
11	テキストまとめとディスカッション（9）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
12	テキストまとめとディスカッション（10）	事後レポート作成
13	情報処理演習	情報処理課題レポート作成、ディベート準備
14	ディベート（1）	ディベート準備、レポート作成
15	ディベート（2）	レポート作成

授業計画コメント		
グループ単位のテキスト輪読や研究発表に向けて、各自が担当分野について複数の文献を読んで理解を深めておくことが望ましい。また、履修者の希望や進行状況に応じて変更・入替あり。		
成績評価		
平常点（出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等）	40%	出席、質疑応答、議論への参加
クラスでの発表など	40%	担当箇所発表およびディベートなど
提出物	20%	レポートなど
テキスト		
秦 忠夫 他『国際金融のしくみ』第4版（有斐閣アルマ，2012）		
参考文献		
参照URL		
備考		
この演習を履修する以前に身につけておくことが望ましいスキル： 読解能力（日本語）、作文能力（日本語）、プレゼンテーション能力（日本語）、調査能力 基本的な読解力、作文力とともに、新聞・ニュース等から自分自身の問題意識を持つ力が望ましい。		

理工学部情報システムデザイン学科（講義形式）

科目名：論理回路
担当者：土屋隆生

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
G1002	△論理回路	2単位	秋学期	京田辺	講義形式

概要

IT技術は言うまでもなく，コンピュータなどのハードウェア無しでは成り立たない。また，高度なソフトウェア開発にはハードウェアの知識も重要である。本講義では，ハードウェアを理解する上で必須となる論理回路について学習する。さらに，ハードウェアをソフトウェア的に設計するためのハードウェア記述言語の基礎についても講述する。

到達目標

（1）論理回路の基礎を理解できるようになる。
（2）組み合わせ回路や順序回路の基礎を理解できるようになる。
（3）簡単な論理回路が設計できるようになる。
（4）ハードウェア記述言語を用いた論理回路の設計法を習得できるようになる。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	ガイダンス，ディジタルとアナログ，2進数	予習・復習
2	基本論理回路	予習・復習
3	ベン図，ブール代数	予習・復習
4	組合せ回路，カルノー図	予習・復習
5	代表的な組合せ回路	予習・復習
6	算術演算回路	予習・復習
7	ディジタルIC	予習・復習
8	中間評価	予習・復習
9	パルス回路，フリップフロップ1	予習・復習
10	フリップフロップ2	予習・復習
11	カウンタ	予習・復習
12	カウンタの設計	予習・復習
13	メモリ，A/D・D/A，FPGA，HDL	予習・復習
14	VHDL	予習・復習
15	まとめ	予習・復習

授業計画コメント		
受講者の理解度に応じて，授業計画を変更することがある。		
成績評価		
平常点（クラス参加，発表，グループ作業の成果等）	10%	講義の理解度を高めるために演習の実施とレポートの提出を行うことがある（複数回）。
中間評価	45%	論理回路の基礎が理解できているか評価する。
期末筆記試験	45%	論理回路設計について総合的に評価する。
テキスト		
春日　健『よくわかるディジタル回路』（電気書院、2012）		
参考文献		
参照URL		
備考		

スポーツ健康科学部（講義形式）

科目名：コーチング論
担当者：松倉啓太

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
F2035	○コーチング論	2単位	春学期	京田辺	講義形式

概要

本講義では，スポーツの指導，コーチングの場面において，「選手を目標とする姿へと導いていく」というコーチングの目的を遂行するために，必要な考え方や指導法を学んでいく。
そのために，ケーススタディやグループでのディスカッションを通して，多岐にわたる競技特性，指導対象やマネジメント活動に対しての自らの考えや意見をまとめていく。

到達目標

1. 積極的な授業への参加を通してコーチに必要な哲学，ならびにコーチングにおける分析，計画，実行のそれぞれ局面において必要な要素を理解すること。
2. 自らの競技活動において，セルフコーチングをできるようになり，自身のパフォーマンスの向上に役立てることができるようになること。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	ガイダンス: コーチングの概念について	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
2	指導者としてのあり方： コーチ指導者に求められる資質とは，コーチングにおける哲学について	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
3	競技者育成のために必要な要素： システム，環境，長期的視野に立った展望について	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
4	コーチングのスタイル： どういうようなコーチになるのか，指導対象に合わせたコーチング	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
5	コーチングの心理： 選手への動機づけ，心理的サポート	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
6	コミュニケーションスキル： どのように伝えるか，聞くか	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
7	トレーニングとは①： トレーニングの概念，どのように現状のパフォーマンスを評価するか	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
8	トレーニングとは②： トレーニング計画の立て方，いつどのようなトレーニングを行うか	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習

9	トレーニングにおけるコーチング法①： 技術的要素の習得（どのように技術を身につけるか，体力・戦術的要素とのかかわり）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
10	トレーニングにおけるコーチング法②： 戦術的要素の習得（戦術とは，どのように理解させるか）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
11	トレーニングにおけるコーチング法③： 体力的要素の習得（種目特性に応じて必要とされる体力的要素は何なのか，どのように動機づけさせていくか）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
12	コーチングにおけるリスクマネジメント： コーチング現場におけるリスクとは，知っておく必要のある医学的知識	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
13	チームマネジメント： チームにおける哲学，組織作り（どういう役割が必要で，何が求められるのか）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
14	まとめ	復習
15	授業内評価	

授業計画コメント

受講者数などに応じて，授業計画を変更する可能性がある。

成績評価

平常点（出席，クラス参加，グループ作業の成果等）	30%	出席状況やグループでの活動内容により評価する。
小レポート	40%	内容の妥当性だけではなく，独自性も評価対象する。
授業内評価	30%	内容の妥当性だけではなく，独自性も評価対象する。

テキスト

テキストは特に定めない。

参考文献

レイナー・マートン，大森俊夫・山田茂（監訳）『スポーツ・コーチング学―指導理念からフィジカルトレーニングまで―』（西村書店、2013）
日本体育協会　『公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

参照URL

備考

グローバル・コミュニケーション学部（外国語）

科目名：コミュニカティブ・イングリッシュ２（Intermediate）
担当者：中田賀之

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
95014-532	コミュニカティブ・イングリッシュ２（Intermediate）	1単位	秋学期	今出川	講義形式

概要

予備知識のあるトピックを聞いて，おおよその内容を理解できるようになること，授業で学習した語彙や表現を用いて，自分の感想や意見を述べることができることを，このクラスでの指導目標とする。BBCニュースを聞きながら，リスニング・ストラテジーを学び，学習した語彙や表現を用いて自分の意見を述べられる英語表現力の養成を目指す。BBCニュースで扱われた題材を使用し，１）テキストの内容を理解，２）聞き手を意識した発話になるような音読および発音練習，３）聞き手を意識した自己表現の練習（シャドーイング等による），４）語彙や表現のネットワークの構築化を図る。具体的には，１）リスニング課題の予習，２）語彙や表現をノートに整理，３）エッセイの事前作成（電子掲示板に入力）とその口頭発表をしてもらう。このような活動を通して，コミュニケーションにおける聞き手の理解および自身の英語への気づきと分析力をつける。

到達目標

ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のB1（「聴解力」，「表現力」）レベルを到達目標とする。具体的には，次の通りである。
・身近な話題について，明瞭かつ標準的な話し方で話された場合には，要点を理解することができる。
・簡単な方法で語句をつないで，自分の経験や出来事，夢や希望，目標等を語ることができる。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	イントロダクション Unit 1 Puppies at the Tower of London	Unit 1の予習
2	Unit 1 Puppies at the Tower of London 発表	Unit 2の予習
3	Unit 2 Cosplay in London 発表	Unit 3の予習
4	Unit 3 Shakespeare in London's East End 発表	Unit 4の予習
5	Unit 4 Who Owns Banksy's Street Art 発表	小テスト・音読課題の準備
6	小テスト１・音読リフレクション	Unit 5の予習
7	Unit 5 A Crip under the Skin 発表	Unit 6の予習
8	Unit 6 Houses Built from Straw 発表	Unit 7の予習
9	Unit 7 Paternity Leave 発表	Unit 8の予習
10	Unit 8 Young Voters 発表	Unit 9の予習

11	Unit 9 Teaching Digital skills 発表	Unit 11の予習
12	Unit 11 Scotland's Future　発表	小テストの準備
13	小テスト２	グループ発表
14	小テスト３（口頭発表）	発表リフレクション，小テスト準備
15	小テスト３（口頭発表）・まとめと復習	まとめ

授業計画コメント

上の計画に沿った円滑な進行を実現するため，必ず指定箇所を予習した上で授業に臨むこと。リスニングの課題の予習にあたっては，何回視聴し答えに至ったか，この答えに至った理由やキーワードなどを書いておくこと。また，エッセイについては，いずれの立場をとってもいいが，必ず多面的な視点で論じること。語彙，表現・構文，エッセイをノートに整理しておくこと。遅刻・欠席および私語厳禁

成績評価

平常点（出席，クラス参加，グループ作業の成果等）	15%	積極的な学習態度を評価する。
小テスト	45%	学期内で３回小テストを行う（15＋15＋15）
提出物	10%	エッセイ，音読分析
CASEC	30%	試験期間中に行う。

成績評価コメント

上記の評価項目を総合して最終的な成績を算出する。なお，全授業回数の3分の2以上の出席がない場合，期末試験を受験する資格を失う。中間・期末試験の受験は必須である。その他の詳細については第1回の授業で解説する。

テキスト

Timothy Knowles，Daniel Brooks，Yukiko Takeoka，Mayumi Tamura，Rima Uraguchi
『Seeing the World through the News』（金星堂、2016）
92頁　ISBN: 978-4-7647-4015-0

参考文献

参照URL

英辞郎（語学学習用ウェブサイト）
http://www.alc.co.jp

備考

TOPIC

シラバス整備について

シラバス記載上の留意事項について

シラバスの記載にあたっては、学生の主体的な科目選択と学習を促進するよう、以下の留意事項を定める。

①「概要」、「到達目標」、「授業計画」、「授業時間外の学習」、「成績評価基準」、「評価のポイント」の6項目を必須記載項目とする。予めシラバス書式に記載する「成績評価基準」の評価項目は、学部・研究科・センターFD委員会において決定する。

・「概要」は、科目全体の内容、狙い、キーワード、授業の進め方を分かり易く記載する。

・「到達目標」は、学生を主語に「～ができるようになる」というように、知識、技能、態度について、具体的な到達目標を記載する。

・「授業計画」は、学年暦に定める所定の授業回数を想定したものとし、各回の授業計画を可能な限り具体的に記載する。授業中に評価を実施する場合は、定期試験と区別するために「中間評価」「授業内評価」と記載する。

・「授業時間外の学習」は、予習、復習等、授業時間外に必要な学習について可能な限り具体的に記載する。

・「成績評価基準」は、複数の評価項目を使用することを前提とし、各評価項目の最終成績に占める割合を「%」で明記する。

・「評価のポイント」は、評価毎にどのような点が評価のポイントになるか、可能な限り具体的に記載する。

②「テキスト」、「参考文献」を使用する場合は、必ず記載する。その際、出版元、出版年は必ず明記する。

③授業の中でホームページ等を参照する場合は、「参照URL」にアドレスを必ず明記する。

④科目の性格上、上記留意事項による記載が困難なものは、学部・研究科・センターFD委員会において適切な記載方法を定める。

記載内容の点検について

シラバス原稿を各学部・研究科・センターにおいて点検し、留意事項に照らして記載に明らかな不備が認められる場合は、学部・研究科・センターFD委員会より文書等で担当者に改善の要望を行う。なお、平成25年度より実施されている「私立大学等改革総合支援事業」と関連して、「平成27年度私立大学等改革総合支援事業調査票」の中でも、シラバスの記載内容の第三者チェックに関する項目が挙げられている。

【ご参考】平成27年度私立大学等改革総合支援事業調査票（一部抜粋）

タイプ1「建学の精神を生かした大学教育の質向上」

（2）教育の質向上に関するPDCAサイクルの確立

⑥シラバスの作成要領等により、準備学習（予習・復習等）に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容をシラバスに明記することを全教員に求めていますか。【重点項目】

1	全学部等・研究科かつ全学年で実施している。	10点
2	一部の学部等・研究科又は一部の学年のみで実施している。	5点
3	実施していない。	0点

⑦シラバスの作成要領等により、シラバスに到達目標を明記することを全教員に求めていますか。

1	全学部等・研究科かつ全学年で実施している。	4点
2	一部の学部等・研究科又は一部の学年のみで実施している。	2点
3	実施していない。	0点

⑧シラバスの記載内容が適正か否かについて、担当教員以外の第三者がチェックしていますか。

1	全学部等・研究科かつ全学年で実施している。	5点
2	一部の学部等・研究科又は一部の学年のみで実施している。	3点
3	実施していない。	0点

開講後のシラバス記載内容の変更について

シラバス記載内容に関しては、開講後に変更しないことを原則とする。やむを得ず変更する場合は、以下の点に留意し、適切な対応をとることとする。

①「概要」「到達目標」「成績評価」の3項目については、変更不可とする。

②「授業計画」「テキスト」「参考文献」「参照URL」の項目については、変更することが教育的に望ましいと担当者が判断した場合には、受講生と相談の上、開講後も若干の変更を可とする。

・授業計画を変更した場合は、教室で配布する紙媒体のシラバスあるいはWEBシラバス入稿システム上での修正によって、受講生に周知する。

・科目の性質上、シラバス入稿時に授業計画等の変更が予測される場合は、予めその旨を授業計画コメント欄に記載しておく。

03 さまざまな授業形態

1.学生の学びを引き出すための授業形態

・大講義
・演習
・サービス・ラーニング
・PBL（Project Based Learning）
・インターンシップ
TOPIC／本学教員の授業の様子が知りたい

2.授業の創意工夫

・事例1　授業での英語の取り入れ方
社会学部教育文化学科
William R. Stevenson III
・事例2　日本人学生と留学生との「学び合い」
政策学部　岡田彩
・事例3　授業でのグループワークの取り入れ方
文化情報学部　宿久洋
TOPIC／教育活動支援制度

1.学生の学びを引き出すための授業形態

現在、大学の教育現場において、様々なスタイルの授業が展開されています。ここでは、伝統的な授業形態である大講義や演習と、いくつかの新しい授業形態について紹介します。

大講義

大学では、伝統的に、大勢の学生を前にひとりの教員が講義を行う方法がとられてきました。このような大講義は、少ない教員数で、多くの学生に教育することができるという意味で、効率的な授業スタイルといえるでしょう。

しかし、90分という授業時間を通じて、学生の関心を継続させるには、それ相応の工夫が必要とされます。常に学生の顔を見て話をし、学生の理解度を推し量りながら、もしも学生が理解しきれていないという表情を浮かべたら、臨機応変に話した内容を繰り返します。講義は基本的に一方向にならざるをえませんが、たえず学生たちに問いかけ、必要に応じて学生を指して発言を求めるのも、緊張を保つのにいい方法だといえるでしょう。

講義の構成は様々ですが、最初10分程度は、前回の授業の復習やシラバスにおけるその日の授業の位置づけ、最近の話題などを話して学生たちの関心を惹きつけます。その後、本論に入り、最後の10分程は、全体のおさらいと次回に向けて準備しておくことを話すのが一般的です。

大講義においては、パワーポイントを使った授業が一般化しています。板書をする時間を省くことができ、グラフ・図・写真など、視覚的な情報を提供することもできます。また、レジュメや資料の配布も学生の理解度を高めるうえで、とても有効です。しかし、下手をすると、パワーポイントに映し出された画面を書き写し、プリントを入手するだけで、学生たちが満足してしまうおそれもあります。講義で話す内容を学生が主体的に聴き取り、ノートをとる部分を作っておくことも必要です。

そのほか、講義に関連するゲストスピーカーを呼んで講演をお願いし、学生たちと質疑応答する時間を設けたり、リレー講義を企画し、多様な視点からその科目についてアプローチしたりと、いろいろな方法が考えられます。

大講義の場合、教員と学生の関係は希薄なものとなりがちです。授業の後やオフィスアワーに質問に来る学生にきちんと対応したり、メールによる問い合わせに丁寧に回答したりすることで、熱心な学生たちの期待に応えていく必要があります。授業中にアンケートをとるなどして、学生たちの率直な意見を授業に反映させる方法もあります。

なお、大学が用意しているe-classも、大講義において教員と学生のコミュニケーションを形成していくうえで、非常に役に立つツールです。

参考URL

●e-class
https://eclass.doshisha.ac.jp/

演習

少人数のクラスにおいては、大講義に比べて、様々な仕掛けを授業の中で用意することができます。オリエンテーションや導入講義など、一部講義のスタイルを採る必要があるかもしれませんが、少人数であるからこそ試みられる工夫もたくさんあります。

たとえば、クラスをいくつかの小集団に分け、課題を与えてグループワークを行う方法は非常に有効です。グループで真剣に議論することになるので、自分の意見を明確に述べるコミュニケーション能力が向上します。また、他のメンバーの意見や発想に触れることで視野が大きく広がります。グループワークでは、自分たちで一定の結論を出さなければならないので、自主性が育まれ、多様な意見を集約して一つの結論に導いていくプロセスは、大講義では得られない大切なスキルを身につける機会となります。

グループワークを成功させるには、明確な形で課題を与えること、必要な情報を入手する方法を具体的に示しておくこと、議論が迷走したり停滞したりしていないかを確認してファシリテートすることが大切です。グループワークを有効に行うための「ワークショップ」についての解説書がいくつか出版されているので、参考にするとよいでしょう。

また、演習は、個人個人に課題を与えて、それを発表する場としても役立ちます。演習の人数にもよりますが、少人数であれば、すべての学生に報告の機会を用意することができます。発表者には、自分の報告内容を相手に理解してもらうためのスキルを身につける機会になります。パワーポイントによるプレゼンテーション、レジュメ・資料の作成・配布を義務づけると、大きな教育効果が得られます。

報告者以外の学生たちの関心を惹きつける方法にも工夫が必要です。疑問点・問題点を指摘しやすい雰囲気をクラスに作るとともに、コメントシートを用意して、他の学生たちの意見を報告者にフィードバックする方法も考えられます。演習における活発な意見交換を通じて、研究に求められる論理性や実証性を学ぶことができます。

サービス・ラーニング

大講義と演習は、基本的に大学の中での授業を前提としていますが、サービス・ラーニングは、学生を構外に連れ出し、地域社会の諸問題に触れさせ、具体的な解決のプロセスに関わる機会を提供することによって、様々なことを学んでいく授業スタイルです。

たとえば、河川の美化運動に参加することで、環境問題の重要性を認識し、ゴミの不法投棄を解決する方法を具体的に考えたり、一人暮らしの高齢者の支援に関わることで、高齢者福祉の抱える問題を認識し、地域の中で高齢者を支援するネットワークを具体的に構想したりする機会が与えられます。サービス・ラーニングでは、取り組むべき課題をめぐる理論や法制度について事前に学習し、地域に関わってからは経験したことをクラスに持ち帰り、その意味を考える時間を用意する必要があります。理論と実践の往来がサービス・ラーニングを成功させる秘訣であると言われています。

学生たちは、自分たちの活動が地域の課題解決に役立ったという成功体験を通じて自信を深め、主体的に地域の問題に関わっていく意識を醸成することになります。

PBL（Project Based Learning）

PBLは、Problem Based Learning とProject Based Learning という2つの意味で使われ、しばしば混同されています。ここでは、後者について紹介します。Project Based Learning とは、一般的には、プロジェクトの企画・実施を課題として提示し、学生に主体的に考えさせ、行動を導く教育スタイルを言います。本学では、全学共通教養教育科目として「プロジェクト科目」が設置されていて、その多くは、このスタイルに則って授業が行われています。

重要なポイントは、学生にプロジェクトの目的は提示しますが、プロジェクトの具体的な進め方については、教員は答えを示さず、学生が試行錯誤しながら発見していく点にあります。教員は、学生がプロジェクトに取り組みやすい環境や条件を整備し、必要な情報を与え、成果について評価を与えることになります。

PBLには、大講義とは違った意味での周到な準備が必要で、大学内外の多くの人や組織の協力を得なければ成功しません。それだけに、学生に与える教育的な効果は大きいと言われています。

インターンシップ

インターンシップは、現在、全国の大学のカリキュラムにおいて重要な位置を占めつつある授業形態です。一定期間、民間企業、行政機関、NPOなどの現場に入り、そこで働く人たちと一緒に活動することで、インサイダーの視点から、職場体験をします。

インターンシップを通じて高まった学生のモチベーションを受け止め、実践と学習を結び付けることができるような授業が求められてくるでしょう。

現在、本学キャリアセンターや大学コンソーシアム京都が実施する正規のインターンシップ科目に加え、課外でも様々なインターンシップの機会が用意されています。

就職活動における ミスマッチを防ぐキャリア教育
働くことの意味を考え、キャリアイメージを作り上げ、自分の資質を見極め、自分に合った就職先を探す実践的な機会を提供します。

＋

大学の授業に参加する 意識付けを行うツール
明確なキャリアイメージのもと、希望する就職先が求める知識やスキルを認識し、明確な問題意識を持つ。

→ **インターンシップ**

TOPIC

本学教員の授業の様子が知りたい

大学入学準備講座

本学では、高大連携事業の一環として、高校生向けに、大学で必要な学力レベルを教えるためのプログラムとして、「大学入学準備講座」を開講しています。この講座では、本学の学部・学科の教員が、それぞれの専門分野で扱う学問の内容から高校生が興味を持ちそうなテーマを選んで、実際の大学での授業と同じ形式で講義を行なっています。また、過年度講座の講義風景を動画で配信しています。普段は見る機会の少ない同僚教員の授業風景が見られる貴重なコンテンツですので、「授業改善に役立てたい」、「授業運営のヒントを探している」という教員の方は是非ご活用ください。

●学習支援・教育開発センターホームページ【大学入学準備講座】
http://clf.doshisha.ac.jp/preparation_course/course.html

※動画の視聴にはID・PWが必要です。ご覧になられたい方は、学習支援・教育開発センター事務室までお問い合わせください。

学びへのいざない

「学びへのいざない」は、学内で評判の講義、教育改善のヒントになる授業を撮影・収録し、効果的な編集を加え、学内外に発信するものです。いずれも、多彩なトピックを取り扱い、現代のアクチャルな課題に切りこむ内容のものばかりですので、新たな授業デザイン・教育技法を開発し、効果的な学習環境の使い方を知る参考映像として是非ご活用ください。

●学習支援・教育開発センターホームページ【学びへのいざない】
http://clf.doshisha.ac.jp/manabi/manabi.html

オープンコースウェア

本学では、同志社大学オープンコースプロジェクトの一環として、本学の授業で実際に使用されている教材をインターネット上で公開しています。教材を公開している教員は、教材に対して学内外から寄せられる意見等を聞くことで、自身の教育内容を再確認するとともに、改善・充実の機会とすることが可能となります。また、未公開であっても、同僚教員が授業で使用している教材を参照することで、授業改善に役立てる様々なヒントが得られるコンテンツとなっています。

●学習支援・教育開発センターホームページ【オープンコースウェア】
http://opencourse.doshisha.ac.jp/

TOPIC

授業デザイン研究会

学習支援・教育開発センターでは、2014年度より、学習効果が期待できる授業手法や大規模授業における運営方法、授業への英語の取り入れ方などを、本学に所属する教員同士が気軽に情報共有、意見交換することを目的として、授業デザイン研究会を開催しています。日々、様々な試行錯誤を重ねている教員同士が、学部・学科という組織の枠を越えて学び合い、交流し合える貴重な場となっており、研究会を通じて、学生のアクティブな学びを取り込んだ授業が広がっていくことを期待しています。

※授業デザイン研究会の動画と資料については、「教職員のページ」（本学教職員のみ閲覧可能）内の「教職員研修」ページで公開しています。

コミュニティサイト開設のお知らせ

授業改善・教育改善のために工夫していることや、アイデアなどについて、意見交換・情報共有できる場として、本学ポートフォリオシステムに**コミュニティサイト：「授業デザイン研究会」**を開設しました。

本サイトでは、掲示板でのディスカッションや、資料のアップロードなどの機能が利用できます。

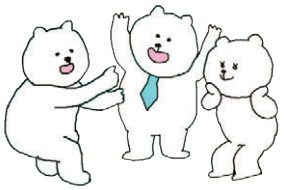
過去に実施した授業デザイン研究会の動画、資料等を掲載しています。

アクセス方法

- Web シングルサインオンに本学発行アカウントにてログイン
  https://sso.doshisha.ac.jp/
- Go Global　ポートフォリオ/Portfolio

にアクセス

関心のある方は、システムへメンバー登録しますので、学習支援・教育開発センター事務室までご連絡ください。



**★その他、ご不明な点がございましたら
お気軽にお問い合わせ下さい★**

2. 授業の創意工夫

授業の展開においてはさまざまな創意工夫が求められます。ここでは、ユニークな授業に取組んでいる事例について、様々な授業形態からご紹介します。

事例 1　授業での英語の取り入れ方

社会学部 教育文化学科　William R. Stevenson III

英語を取り入れた授業を、少人数授業と大人数授業で実践している事例を紹介します。

Educational Mission

1. To teach through **play**, not compulsion
   （義務的にではなく、遊びを通じて学ばせる）
2. To teach **how to think**, not what to think
   （考える内容ではなく、考える方法自体を学ばせる）
3. To promote **English as a means**, not an end
   （英語は目的ではなく、目的に達する手段としてのみ促進する）
4. To promote **community** and **interdependence**, not competition and independence
   （競争ではなく、共同と協力・独立ではなく、相互存在を促進する）
5. To connect ethical ideas to **moral action**
   （倫理のある思想を道徳的な行動に繋げさせる）

授業法

①少人数授業

授業前から、一緒にパーティや食事をする機会を設けることで、日本人学生が自然と英語を使って会話やディスカッション、ディベートをしやすくなる雰囲気づくりを心がけています。また、コミュニティ形成のためにfacebook等のSNSも積極的に活用しており、ゼミ生専用のコミュニティページの中で教員も学生も自由に英語で情報発信が行えるようにしています。

実際の授業では、反転授業を取り入れるようにしています。教員が指定したオンラインコンテンツを学生には事前に視聴してきてもらい、授業内ではディベート中心の授業を実践しています。また、学生自身が興味を持ったゼミの専門内容に関連する研究や、街中で実施した調査活動の成果を英語と日本語のレポートにまとめてもらい、facebookのコミュニティページ（誰でも閲覧が可能）にアップデートすることで研究成果を世界に発信できるようにしています。

②大人数授業

クラスの中には英語が得意な学生もいれば、そうでない学生もいるため、授業は英語とセルフ通訳を併用しながら進めるようにしています。担当する授業が主に1、2年生対象であるた

め、授業内で使うコンテンツにも力を入れ、エンターテイメントをきっかけにして授業で伝えたい内容に興味を持ってもらえるような工夫をしています。そのため、授業スタイルも講義中心で専門的な内容を教えるという形態は極力とらないように心掛け、各回の講義テーマに関連するコンテンツを見せたうえで、まずは学生同士がディスカッションできそうな質問を教員から投げ掛けるということを意識しています。1つの質問が終わったら、別の質問を投げ掛けるということを繰り返しながら、質問を通じて、学生が授業の内容を理解していくことを目指しています。また、今後の新たな取り組みとして、大人数授業におけるTwitterの活用の可能性についても模索しています。Twitterを使って各グループのディスカッションの結果を把握できるようにするだけでなく、授業内で使用した資料やコンテンツがTwitter上から見られるような仕組み作りも検討しています。

事例2 日本人学生と留学生との「学び合い」

政策学部　岡田 彩

日本人学生と外国人留学生が学び合う機会を創出し、それぞれの目標に向かって成長することを目指した実践事例を紹介します。

対象となる講義

政策学部にて開講している「アカデミック・スキル1」「アカデミック・スキル2」（いずれも教授言語は英語）と、京都アメリカ大学コンソーシアム（以下、KCJS）の日本語クラスが共同で取り組むプロジェクトとして、2013年度春学期～2015年度秋学期に実施しました。

経緯

KCJSの日本語講師との個人的な出会いをきっかけに、「国際的な経験を積みたい」政策学部

生と「日本の大学生ともっと関わりたい」留学生の声に応えるべく、それぞれが担当する授業の枠組の中で「できることからやってみよう」という思いから始まりました。

講義を運営する上で意識していること

「学び合い」の効果的な促進を目的に、「共通の目的の下、共に協力して行う学び」、「それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び」、「インフォーマルな学び」の3つの仕掛けを実践しています。

①共通の目的の下、共に協力して行う学び

京都在住の職人から「仕事への取り組み姿勢」を学ぶ取材プロジェクトや、プロが書いた「ポリシーメモ」を英語に翻訳する合同授業など、共通の短期的な目標を定め、その達成に向けて日本人学生と留学生が力を合わせます。

②それぞれの目的のために、互いに力を貸し合う学び

レポートや論文、プレゼンテーションなど、それぞれの授業で取り組んでいる課題を助け合う「ピア・エディティング」を行っています。日本人学生と留学生が1対1のペアになり、お互いの文章や学習内容を添削し合うことで、学び合いを促進します。

③インフォーマルな学び

授業での共同学習を円滑に進められるよう、学生が企画したゲームなどを楽しむ交流会を行っています。授業以外の時間にも、お互いを知り、交流を深めるきっかけとなっているようです。

まとめ

外国人留学生は、日本人学生が学内にいながらにして国際感覚を養うことのできる貴重な存在です。しかし、同じ空間にいるだけでは、「学び合い」は促進されません。教員がそれぞれのクラスの目的を共有し、日本人学生、外国人留学生のニーズを十分汲み取った上で、双方の学びを最大化させるための「仕掛け」を工夫することが、とても大切だと感じています。

事例3 授業でのグループワークの取り入れ方

文化情報学部　宿久 洋

大講義授業を学生が主体的に学ぶ、「学びの場」へと変える事例を紹介します。

対象となる講義

1年生を対象に、データサイエンスの導入レベルの講義と演習を行なっています。

経緯

2010年当時の授業の様子は、講義中にもかかわらず、寝たり、おしゃべりをしたり、遅刻したりする学生が多く、他の教員から「動物園」と言われてしまうような状況でした。教員も毎回学生に対して注意しなければならない状況に辟易していた時、「いっその事、グループの中で話したり、考えたりできるような仕組みを取り入れてみたらどうだろうか」と頭に浮かんだことが、教室を「学びの場」へと転換するきっかけとなりました。

講義を運営する上で意識していること

講義の準備段階から、「いかに教える知識を少なくするか」ということを意識するようにしています。また、講義が始まった時も、教員から言葉を発して講義を進めるのではなく、「いかに教員が発する言葉を減らすか」、「いかにグループワークを行なっている学生を見守れるか」が、グループワークを取り入れた講義を行なう上では大切だと考えています。

グループワークを盛り上げるためにしている工夫

①アイスブレークを取り入れる

ゲーム的な要素を取り入れながら学生同士が自己紹介する時間をグループワークの前にとるようにしています。10分～15分程度を費やすことになりますが、その後の盛り上がり方を考えると充分取り入れる価値があります。

②グループワーク中に学生自身の手で教材を作る

講義で使う教材を学生自身に作ってもらうという取り組みも、グループワークなら実践が可能です。実際に、紙ヘリコプターや紙サイコロを作って、データ収集の教材として活用しています。

③グループの目標や反省を書いてもらう

目標や反省をグループ毎に書いてもらうことで、学生にとっては、他のグループの状況を把握する材料になり、教員にとっては、各グループの反省点を授業中にフィードバックすることで、学生からの信頼感の向上に繋げることができています。

④学生に出す問題に数式はあまり用いないようにする

文理融合型の学部であり、数式を用いた問題を出すと理系出身の学生ばかりが理解できると

いう状況に陥ってしまいます。グループワークを円滑に進めるためには、数式は極力使わないような問題を出すように意識しています。

グループワークを導入した成果

講義の中で、学生に教えているのは教員だけではありません。学生同士がお互いに教え合ったり考えたりすることが、結果として学生の理解度にも大きな影響を与えていることがグループワークを実践した結果見えてきました。また、授業外に学生同士で集まって話し合いをしていたりする光景も出てくるなど、現在では授業の内外で学生が主体的に学ぶ「学びの場」へと変わることができています。

TOPIC

教育活動支援制度

学習支援・教育開発センターでは、教員による積極的な教育活動を更に活性化することを目的として、以下の支援制度を設けています。

教育方法・教材開発費制度

本学における授業改善をさらに促進するために、専任教員を対象として、新たな教育方法および教材開発に必要な費用全般を対象とする補助を行う制度です。

毎年秋学期に次年度の開発費の申請を受け付けます。公募要領等が決定しましたら、各教員のメールボックスに案内を配付します。

●学習支援・教育開発センターホームページ【教育方法・教材開発費制度】
http://clf.doshisha.ac.jp/support/development/materials.html

教育開発調査活動費制度

この制度は、本学の教育の質的向上のための積極的な調査活動を支援するために、教育開発に関する各種学外企画参加に必要な費用の補助を行うものです。

学習支援・教育開発センターよりお知らせするFD関係学外企画への参加

補助の対象となる企画は、学習支援・教育開発センターホームページの「研究会・研修会のご案内」に逐次掲載されます。参加を希望される場合は、学習支援・教育開発センター事務室まで申し出てください。

●学習支援・教育開発センターホームページ【研究会・研修会のご案内】
http://clf.doshisha.ac.jp/research/research.html

メーリングリストでも案内をしていますので、メーリングリストへ登録を希望される場合は、学習支援・教育開発センター事務室まで登録用のメールアドレスをお知らせください。

上記以外のFD関係学外企画への参加

学習支援・教育開発センターホームページに掲載されていない企画であっても、一定の限度額の範囲内であれば補助の対象となる場合もあります。FD関係の学外企画への参加を希望される場合は、事前に**「教育開発調査活動費申請書」**を学習支援・教育開発センター事務室まで提出してください。

「教育開発調査活動費申請書」は学習支援・教育開発センターホームページよりダウンロードできます。

●学習支援・教育開発センターホームページ【教育開発調査活動費制度】
http://clf.doshisha.ac.jp/support/action.html

補助の申請のあったものについては、学習支援・教育開発センター運営会議で審議し、補助の可否を決定します。ただし、申請者個人が所属する学会・研究会が主催する企画については申請できません。
※支給金額は1名につき年間15万円を上限として補助します。

マルチメディア教材作成費

この制度は、本学の遠隔講義等の円滑な実施を支援するために、マルチメディア教材作成に必要な費用の補助を行なうものです。

マルチメディア教材作成費制度の利用を希望する場合は、今出川校地教務課から案内される「遠隔講義等実施計画調査票」を提出し、承認を得た上で、原則として使用する2週間前までに**「遠隔講義等の実施に係るマルチメディア教材作成費申請書」**を、学習支援・教育開発センター事務室まで提出してください。

補助の申請のあったものについては、学習支援・教育開発センター運営会議で審議し、補助の可否と補助金額を決定します。
※セメスター1科目あたり5万円を上限として補助します。ただし、複数科目を合同で同一時間帯で実施するものについては、それらを合わせて1科目とみなします。

各学部・研究科・センターFD活動費制度

この制度は、学習支援・教育開発センターが、各学部・研究科・センターレベルでのFDに関する組織的な取組みに対して、年間一律30万円を配分している制度です。FD活動費の具体的な使用例については、下記のとおりです。

①卒業時アンケート調査・新入生対象アンケート調査関連費用
②FD合宿関連費用
③FD講演会・セミナー等開催関連費用
④FD関連書籍購入費用
⑤授業評価における専門的知識の提供に関する費用（講師謝礼） 等

04 試験、成績評価、フィードバック

1.学習到達度の測定

2.テストを作成する際の留意点
・教場試験
・レポート課題

3.成績評価の基本原則

4.厳格な成績評価

5.学生による授業評価アンケートの活用
TOPIC／教学IRについて

6.科目担当者による授業講評

7.クレーム・コミッティ制度

図書資料のご案内

1.学習到達度の測定

およそ「評価」一般が情報ツールであるといわれるように、大学における成績評価も情報提供のツールです。教員がシラバスに明記した講義のねらい（講義概要）に従って、学生がどこまで講義内容を理解しているかどうかを知るツールであり、あるいはシラバスに明記した到達目標に学生がどこまで近づいているかどうかを確認するツール、これが成績評価なのです。つまり「学習到達度の測定」なのです。講義を聴いた学生がどれだけ成長したか、それを知ることができるのです。

そのため、学習到達度の測定は単にA～Fの評点を付ける作業ではありませんし、学生を合格・不合格にふるい落とす手段でもありません。学習到達度の測定は、教員にとっては講義の内容の理解がどの程度進んでいるのか認識し、場合によっては講義の内容を反省するための重要な資料になります。たとえば15回行う講義の中で行われる小テストや中間評価、レポート提出などは、学生の努力と成長の経過を知る方法であるとともに、教員が講義の内容を学生の学習実態に合わせて見直し、改善する手段でもあります。もちろん、テストと試験では採点の後に成績がつき、その結果としてA～Fの評点がつきますが、それは事前に示した客観的な成績評価基準に従って公正に採点・評価されますので、講義計画に従って学習していたかどうかが客観的に確認できる評価基準でなければ情報としては無意味です。そのため、出題の意図や採点基準をあらかじめ明確にしておくことが重要で、小テストや学期末定期試験やレポートについては事後の講評を学生に示すことが不可欠です。

ところで、学生の学習到達度を測定する方法は多様化する傾向にあります。たとえば学習到達度を知るためのツールとして論述試験、課題調査型のレポート試験、講義のキーワードを取り上げた小テスト、対話形式の面接評価、マークシートを使った択一型試験など多様な方法が採用されています。これからも多様な講義・授業の実態、たとえば講義形式、演習形式、フィールドワーク形式などに合わせて、あるいは受講生の人数に合わせてさまざまな試験が考案されるでしょう。

学生の成長に講義がどの程度貢献しているか、これを知るためのツールである学習到達度の測定は、ますます重要になってくるでしょう。

2. テストを作成する際の留意点

どのような形式の試験をするかは、科目の性質や授業の形態、履修者の人数などに応じて異なりますが、ここでは、大きく「教場試験」と「レポート試験」に分けた上で、問題を作成する際の留意点を確認します。

教場試験

一般に入学試験が、大勢の受験者をふるい落とすことを目的とするのに対して、大学の定期試験や小テストは、学生の習熟度を測ることを目的としています。したがって、試験問題は、履修者の大半が知らないことを出題するのではなく、シラバスにある授業目標に、学生たちがどこまで到達したかを測るものでなければなりません。この観点からすれば、平均点が極端に低い場合などは、授業内容と試験問題が適合しているかどうか、ひとつ検討してみることも必要でしょう。

試験の出題形式には、大きく分ければ、「選択式」と「論述式」があります。それぞれのメリット、デメリットを踏まえた上で、両者を組み合わせるなどの工夫をする必要があります。

	選択式	論述式
メリット	問いと答えが一対一で対応し、採点基準が明確なため、採点しやすく、客観性・公正性が高い。また、数多くの設問が作れるため、広範囲から満遍なく出題し、学習要素を網羅することもできる。	履修者の総合的な力を見ることができるほか、答えが画一的ではないので、さまざまな観点からの回答が評価できる。
デメリット	知識偏重になりやすく、論理的思考力や文章力などを測るのが難しい。	多くの要素がひとつの設問に含まれるため、答えが千差万別となり、評価基準も曖昧になりやすく、採点に膨大な時間がかかる。

レポート課題

教場試験が、授業内容に対する学生たちの習熟度を測るのに適しているのに対して、レポート試験は、履修者の自主性を尊重し、特定のテーマを掘り下げて考察してもらうのに有効な方法です。ただし、大学入学以前は、ほとんど「感想文」しか書いたことがない学生も多く、提出されるレポートは稚拙なものとなりがちです。したがって、学習効果を上げるためには、「大学で求められるレポートとは何か」を説明するガイダンスが不可欠です。とりわけ、一年生が多い授業では、レポートの構成の仕方や参考文献の調べ方、引用に際しての「注」のつけ方など、レポート作成上の技術的な問題について、時間をかけて説明する必要があります。また、近年問題となっている「コピペ」（インターネットからのコピー＆ペースト）対策としては、引用のルールを徹底させるほか、レポート課題を授業内容に関連させて提示し、扱うべき論点をいくつか具体的に指示するなどの工夫が必要です。

学習支援・教育開発センターでは、正課外のプログラムとして、「アカデミックスキルセミナー」（P.10参照）を定期的に開催しています。学生に対して、こうした学内で提供されているプログラムに、積極的に参加を促してみるのも効果的かもしれません。

参考URL

●試験等の種類と注意（レポート表紙・追試験願ダウンロード）
http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/exam_type.html

3. 成績評価の基本原則

成績評価とは、授業を履修した学生の到達度を示すものです。授業の目標と照らし合わせて、学生がどこまで理解したのか、それを測定し、学生に提示することが成績評価と言えるでしょう。これは、授業を履修していない不特定多数の学生を前提にした試験などの成績評価と異なる点です。成績評価を問題なく行うためには、授業の到達目標と測定方法を具体的に決めておく必要があります。

たとえば100個の英単語を覚えることを到達目標に設定し、筆記試験で測定する場合、すべての単語の意味を答えることができた学生の習熟度は100%、30個の単語の意味しか分からなかった学生は30%となります。この例は極端ですが、実際の授業においても到達目標を可能な限り具体的に定めておく必要があります。「～ができる」という表現を使用するなどして、「この授業ではどのような点が評価のポイントになるのか」を明確にしておくことがよいでしょう。到達目標が曖昧なままでは学生の習熟度を客観的に正しく測定することが困難になり、一貫性のある公平な成績評価ができません。

また、習熟度を測定するには1回の学期末定期試験だけではなく、中間評価や小テスト、あるいは平常点など複数の評価項目による多面的な評価方法を取り入れることが望ましいでしょう。そして最終成績において複数の評価項目が占める割合を「%」で明記することが必要です。（たとえば、平常点20%、小テスト（3回実施30%）、期末筆記試験（50%）など。）複数評価は教員と学生の両者に仕事量を増やすことになりますが、15回の授業を通して教員と学生がインターアクティブに関わり、授業が一方通行にならないためにも重要です。多面的評価方法を取り入れ、できるだけ細かく学生の習熟度チェックを行うことで、学生が抱えている問題を早期に把握し、状況に応じて授業内容の軌道修正、補足を行うことができるという利点にもつながるでしょう。

授業の到達目標や成績評価の方法、基準をシラバスに明記することは言うまでもありません。学生はシラバスを通して授業内容や計画、そして成績評価の方法、基準を把握した上でクラスを選択します。詳細をシラバスで説明しきれない場合、最初の授業で教員と学生との間で共通認識を築いておくことは、双方の思い込みによる意思の齟齬などを防ぐためにも有益でしょう。そしてシラバスに明記したとおりに授業を進めるよう心がけましょう。

最後に、成績評価は学生をランク付けすることが第一の目的ではありません。常に教育的配慮をもって行うことが大切です。学生によって習熟度の進度は異なります。学生自身が問題点を整理し、次の学びにつなげられるように励ますことが大切です。その意味で厳しすぎる成績評価は学生の向上心を低下させます。同様に、甘すぎる成績評価も学生のモチベーションを下げます。

4. 厳格な成績評価

同志社大学では全学でGPA制度を導入しています。学部生は各科目の成績評価を5段階（A、B、C、D、F）で評価し、各成績評価段階に4.0～0.0の評点（Grade Point）を付与して、1単位あたりの評点平均値＝GPA（Grade Point Average）を算出します。なお、大学院科目は7段階（A＋、A、B＋、B、C＋、C、F）で評価し、評点は4.5～0.0とします。

（学　部）A：4.0　B：3.0　C：2.0　D：1.0　F：0.0
（大学院）A＋：4.5　A：4.0　B+：3.5　B：3.0　C+：2.5　C：2.0　F：0.0

GPAは、不合格を意味するF評価の成績も含めて以下の計算式で算出しますが、F評価であった科目を再履修してD（大学院の場合C）以上の評価を得た場合、最後に付いたF評価のみ新たな評価に書き換えられて算出されます。

＜学部＞（大学院は別途）
(A)×4.0＋(B)×3.0＋(C)×2.0＋(D)×1.0＋(F)×0.0／(A)＋(B)＋(C)＋(D)＋(F)
※(A)～(F)はA～F の評価が付いた科目の単位数の合計

GPA制度は欧米の大学で広く導入されており、国際的に通用する成績評価基準であると言えます。グローバルスタンダードに準拠した厳格な成績評価を導入することで、海外留学や外資系企業への就職などの際に、学修の成果を証明する材料として用いることができます。

GPA制度には優れたメリットがいくつかあります。学生にとっては、セメスター毎に成績評価が客観的な数値で示されるので、積極的な学修を促す指標となります。また、評価の公平性や透明性を高めるため、科目・クラスの評定平均値及び成績評価分布が「成績評価状況」としてホームページ上で公開されています。授業担当者にとって、「成績評価状況」は自分の成績評価が適切かどうかを確認する指標の一つとなります。「成績評価状況」を見ることにより、複数の担当者による同一の科目において、各担当者間で評価に偏りがないか、学部間、学科間で評価に大きな格差がないか、といったことをチェックできますので、「成績評価状況」の公開は厳格で公正な評価を授業担当者に促す作用があると言われています。

GPA制度は現在様々な目的に用いられています。学生に対する個別の学修指導の資料に用いられているだけでなく、奨学金や授業料免除対象者の選定基準、大学院入試の選抜基準、派遣留学候補者の選考基準などにも使われています。GPA制度はこのように選考に関連する場面でも幅広く活用されていますので、学生にとって不利益にならないように、授業担当者は厳格で公正な成績評価を心がけるべきであると言えるでしょう。

学生は成績通知書に記載された成績評価に関する質問や異議申し立てをすることができます。質問・異議申し立てをする場合、学生は定められた成績通知書交付日から1週間以内に、所属学部・研究科事務室または各キャンパスの教務センターに採点質問票を提出しなければいけません。その後、事務室が学生に代わって授業担当者に問い合わせを行い、学生に回答をします。授業担当者は学生の質問・異議申し立てに対して真摯に対応することが求められます。

参考URL

●学業成績
http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/record.html
●GPA制度の導入について
http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/gpa/since2004.html

5. 学生による授業評価アンケートの活用

「教える」ことは、すなわち「教えられる」ことである。このことに異論を唱えるむきは、おそらくそう多くはないでしょう。教員が学生を評価するように、学生が教員を評価することも、教育内容の充実にとって、有意義かつ不可欠の作業です。演習のような、少人数の学生と教員が対峙する授業では、学生と教員との間のこのような相互作用はごく自然の流れの中で行われるものですが、講義形式の授業、とくにマスプロ式の大講義においては、学生一人一人の声に耳を傾けるための工夫が必要になります。そこで、本学においても、授業評価アンケートという形で、授業に対する評価とメッセージを学生より収集するための場を設けています。本学では、2002年度秋学期より、全学的に「学生による授業評価アンケート」を実施しており、現在ではWEBおよび調査票を利用した授業評価アンケートを行っています。

学生は、授業の難易度、進め方、スピード、質問への教員の対応等、勉学意欲を高め、かつ理解を深めるためのプレゼンテーション面での工夫を教員がどれだけ行っているか等、いくつかの観点から、授業を5段階で評価します。さらに自由記入欄が設けられており、よりよい授業に改善するための建設的な意見を汲み取ることができる等、非常に貴重な役割を果たしています。

実施時期については、授業の中盤で実施し、当該学期の受講生にアンケート結果を踏まえたフィードバックを行う方法をとっていますが、各学期の終盤の授業において、学期の授業の全体像を学生が把握した段階で実施し、主に次の学期以降の授業内容改善に役立てることや、WEB等を利用して任意の時期にアンケート調査を実施することも可能とし、積極的なアンケート調査の活用を推奨しています。

授業評価アンケートの結果の活用方法については、実に様々な可能性が考えられます。各学部・研究科の自治や特性の多様性を鑑みますと、大学として一律に取り扱い方法を決めることは困難ですし、そうすることが必ずしも適当とは思われません。そこで現に授業評価アンケート結果をどのようにFD活動において活用するかについては、各学部・研究科の裁量に委ねられているところが多いわけですが、次の2点は、大きな方針として、大学全体で共有されているといってよいでしょう。第1に、各教員が自らの授業に対する評価に真摯に向き合うことにより、自発的に創意工夫をする刺激剤となっているという点です。第2に、各学部・研究科が、授業内容の充実・改善に向けた組織的な取り組みを進めるうえで、大きな役割を果たしている点です。たとえば、授業評価アンケートのデータを各学部・研究科の教授会構成メンバー間で共有できるようにし、各学部・研究科のFD委員会が授業改善のための取り組みを推進し、一定の方針を打ち出す際の組織的な検討の基礎資料として、有意義に利用されています。

参考URL

●学生による授業評価アンケート
http://clf.doshisha.ac.jp/evaluation/evaluation.html

TOPIC

教学IRについて

教学IR

学習支援・教育開発センターは、教学IRを担う教員を中心に、学部・研究科等との結節点とした教学改善の実践的な活動を行っていきます。教学IRは幅広い領域を含む活動であるため、本学特有の教学改善の重要課題、改善成果を測る指標、有効な改善手法を探るため、「学生による授業評価アンケート」や「キャンパスライフに関するアンケート調査」（P.12参照）等を企画・実施し、データ蓄積や分析方法の開発・検証を重ねていきます。

6.科目担当者による授業講評

同志社大学

授業講評
Class review

2015年度　春
School year 2015　Spring
110283-000　英語文化特論A(3)　Special Topics in English and American Culture A (3)
110799-000　英語文化特論(2)　Special Topics in British and American Culture(2)

金津 和美　KANATSU KAZUMI

【講評 Class review】

本科目は，映像メディアや電子メディアが台頭する以前の、中世から20世紀初めまでの英米出版文化，活字メディアと文学や社会の関係性についての講義科目 である。グーテンベルクによる活版印刷術発明以前の写本の時代から、大衆読者が誕生し、出版物が商品として生産・消費される近代出版資本主義時代のイギリスとアメリカについて、それぞれの領域を専門とする担当者がリレー講義を行った。

本講義のシラバスを読み、メディアや広告関係など各自のキャリア関連からの興味、また文学を創出する「メディア」そのものやその文化的背景に対する興味、あるいは「テキスト精読/読解」中心ではない講義や専門分野の違う担当者のリレー講義形式への目新しさなど、様々な理由で受講を決めた学生が多かったように思われる。担当者の方も、「文学テキスト」について語るのではなく、それを読者に届け、時代の流れと共振するメディアの役割、文学テキストが創出される歴史的・文化的・社会的文脈に重点を置いた。特に、学際的な科目の性質上、受講生間の文学史やイギリス/アメリカの歴史・文化に対する知識や興味の差を把握すること、さらにそれによって授業内容を調整することが、予想以上に難しかった。ある意味、文学の「裏話」「こぼれ話」のような内容になることもあるが、その面白さや歴史的・文化的意味を真に理解するためには、文学史や歴史の流れをきちんと把握していなければ「面白い裏話」にならないからである。単に「英語で書かれたもの」として文学テキストを読み解くのではなく、その背後にある文化・歴史などにまで関心を広げることの大切さに気付くことで、文学作品や英米文化に対する各自のアプローチの可能性を広げていってほしい。授業の中で関心を持ったことについては自主的に参考文献を読んだりして、積極的に取り組んでもらえればと思う。担当者も授業中に参考文献などを紹介していきたい。必修科目の講義科目と違って、本科目の受講生の興味は様々なので、授業アンケートなどに積極的に希望などを書いたり、またe-classでクラスのサイトを設定しているので、質問 などあれば、担当者に寄せてもらえればと思う。

授業中の小論文3回(各25点)、期末試験(客観問題60点満点を20点満点換算)と出席点で総合評価を算出した。期末試験については、基本的な問題で、論述問題ではなく、選択肢を選んで解答する形式で、平均点は39.56点(60点満点)で昨年と ほぼ同じであった。担当者がそれぞれの最終授業で実施した小論文テストの平均点は18-20点(25点満点)であった。小論文の採点の際、特に印象に残ったことは、あるテーマについて論述する際、配布プリントや各自で作成したノートをもとに、単なる歴史的事実や事象を列挙するのではなく、文学思潮や文化の 時流の中でそれぞれのことを繋ぎながら、その有機的つながりを自分の言葉で明快に説明できているかが評価の分かれ目となったことである。この科目を通して、中世から20世紀初頭までの歴史的・文化的文脈のなかで学んだ、出版文化や文学とメディアの関係性についての知識を、今後の英米の文学研究の取り組みに役立ててほしい。

ひとつの授業をデザインし、シラバスをつくり、毎回、周到な準備や工夫をこらしながら授業を進め、その上で厳正に成績評価をおこなったとしても、それだけでは不十分です。授業を受けた学生たちからすれば、教員が自分たちのクラスの学習達成度や態度についてどのような感想や意見をもっているのか、あるいは授業評価アンケートの結果を教員自身がどのように受けとめているのか、知りたいからです。

また、成績評価や分布を見ただけでは、学生はなぜ自分にこのような成績がつけられているのか、理解できません。どのように学習すれば良い成績が得られたのかがわかれば、その後の学習意欲が高まるでしょうし、反対にわからなければ、学習態度を改めることもできずに同様の失敗を繰り返す、または「裏ガイド」に頼ってしまうなどの悪循環に陥ることにもなりかねません。特にクラスの友人と自分の成績が異なる場合、その理由が明らかにされなければ、学生に教員の成績評価に対する不満や不信が残ることになります。成績をつけて終わり、ではないと言えるでしょう。

したがって、授業期間中だけでなく、授業期間終了後も成績評価結果をふまえた上で学生に様々なフィードバックをおこなうコミュニケーション回路が確保されてはじめて、その授業は完結したことになります。

本学では、すべての開講科目について、その授業期間終了後に大学のホームページ上に、授業担当教員による講評を公開することになっています。授業期間後も学生にフィードバックを与える仕組みです。学生が講評を最もよく読むのは当然ながら各学期の成績が交付される時なので、各担当教員はそれまでに講評を書き込むことがのぞまれます。講評は、次のような項目から任意に取捨選択して、2000字以内で記入することになっており、DUETから入力することが可能です。

■講評に記載すべき事項

- 「学生による授業評価アンケート」の結果に関する担当者の見解
- 登録学生に対する担当者からの感想と要望
- 登録学生の今後の学習活動等に関するアドバイス
- 期末試験やレポート試験の出題意図に関する説明
- 期末試験やレポート試験の解答状況に関するコメント
- 実験あるいは実習等の結果に関するコメント
- クラスの到達目標、授業運営、成績評価基準に関する補足説明
- 最終評価に関する総評

参考URL

●授業講評の公開
http://duet.doshisha.ac.jp/info/kohyoindex.jsp

7. クレーム・コミッティ制度

本学には学生から授業内容や授業方法、成績評価に関するクレームを受け付け、調査、審議の上で解決するクレーム・コミッティと呼ばれる制度があります。クレーム・コミッティ制度は、学部および大学院教育の質の向上を目指して、厳密な成績評価を実施していく取り組みの一環として、GPA制度とあわせて、2004年4月に導入された制度です。

科目担当教員は授業評価アンケートを通じて、授業に対する受講学生の感想や意見について知ることができ、改善につなげることができますが、こうしたアンケートでは表面化しにくい個別の要望や、教員と学生の間の直接的な対話では解決が難しいと考えられるような内容について、各学部・研究科の教務主任等から構成されるクレーム・コミッティが両者の意見を聴取し、授業の改善につながるよう解決をはかることを目的としてこの制度が導入されました。したがって、クレーム・コミッティは学生のプライバシーを守り、クレームの申し立てにより学生が不利な取り扱いを受けないよう配慮しています。

本学の制度では、各学部・研究科・センター単位で複数の専任教員により構成される「学部等クレーム・コミッティ」と、「全学クレーム・コミッティ」の2種類のクレーム・コミッティが設置され、それぞれ以下のような事項が取り扱われることになっています。

■学部等クレーム・コミッティ

学生から申し出のあった以下の事項（クレーム）について取り扱う

①学生と科目担当者の直接の話し合いでは解決できない授業内容や授業方法に関する改善の要望

②成績評価に関する質問や異議申し立て

■全学クレーム・コミッティ

学部等クレーム・コミッティによる対応状況に関する情報交換および調整、ならびに全学的なクレームの調査と対応策の検討

学部等クレーム・コミッティでは次の手順に従い学生の改善要望に対応します。学生から改善要望書が提出されると2週間以内にクレーム・コミッティが開かれ、事実関係の調査を行います。クレーム・コミッティ開催から2週間以内に対応を検討し、結果を文書で学生に回答します。なお、成績評価に関する質問や異議申し立ての場合は、まず採点質問（P.45参照）を受けて、所属学部・研究科事務室から科目担当者に問い合わせを行い、結果を口頭で学生に回答します。回答結果に学生が納得せず、クレーム・コミッティによる調整が必要と判断される場合は、当該学部等のクレーム・コミッティに報告し、改善要望と同様の手順をとります。

学生が申し出るクレームの内容は、制度・カリキュラム、教授方法、授業内容やレベル、シラバス、試験実施要領、試験問題、成績評価、その他に分類できますが、制度導入後の累積で見ると、授業内容やレベル、教授方法、成績評価についてのクレームがもっとも多い状況であり、これらを改善することはFDの上でも重要な課題になります。

クレーム・コミッティは単なる苦情処理のためにあるのではなく、教員と学生の双方が授業に対して真摯な態度で臨むことにより、授業内容を改善するきっかけを作り出す、重要なFDの取り組みであると言えるのです。

図書資料のご案内

学習支援・教育開発センターでは、大学改革やFD関係の図書資料を収集し、専任教職員が閲覧できるようにしています。今回は、当センターが所蔵している書籍の中から、昨今、授業運営に関する書籍等でもよく目にする用語についていくつかご紹介します。

●アクティブラーニング

松下（2015）は、「アクティブラーニングとは、行為すること、行為についてのリフレクションを通じて学ぶことを意味している。わが国の大学教育では、政策的な後押しもあり、ユニバーサル化や能力（スキル）の形成という課題に対応する教育方法として急速に普及してきた」（pp.23-24）と述べています。

また、溝上（2015）は、アクティブラーニング（active learning）を「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」（p.32）と定義しています。

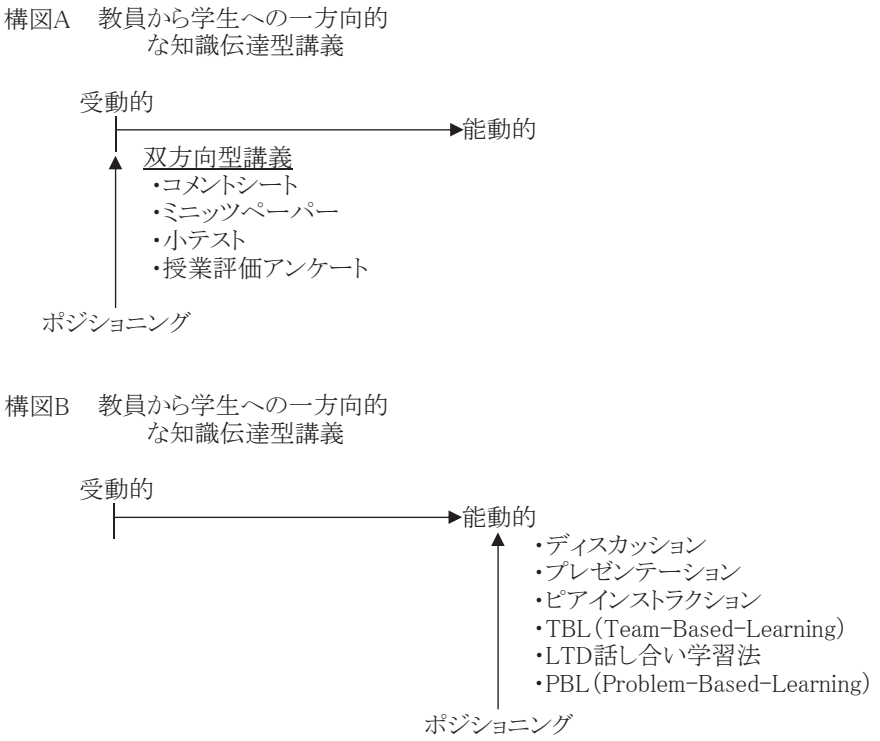


図1-1　ポジショニングで説明するアクティブラーニングの移行（p.36）

●逆向き設計

溝上（2015）は、「逆向き設計は、（中略）コースの最後で、どのような学習成果を学生に求めるかを最初に見定めて、そのためにどのような方法・根拠でアセスメントをおこなうかを決め、それにもとづいてどのように各回の授業をおこなうか、どのような学習を学生に促すか、といったように、コースの終点を見定めてから、起点以降の授業やコース、アセスメントを計画するのである。（中略）高度で多次元化した学習成果に、学生をしっかり導くべく、学習成果やルーブリック・ポートフォリオなどを用いたアセスメントをしっかり見定めてから、授業・コースデザインをおこなうことを目指すものである」（pp.39-40））と説明しています。

●ルーブリック

佐藤（2014）は、「ルーブリックとは『ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具』である。ルーブリックは、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができる。例えば、レポート、書評、討論への参加、実験レポート、ポートフォリオ、グループワーク、プレゼンテーションなどである」（p.2）と説明しています。

プレゼンテーションのルーブリックシート

	改善の必要あり（C）	もう少し（B）	よくできました（A）
声　量	発表全体を通して、教室全体に声が届かず、端では内容がよく聞き取れない。	教室全体に声が届いているが、時々、内容が聞き取れないことがある。	教室全体に声が届いており、最初から最後まで、内容がよく聞き取れる。
視　線	発表全体を通して、聴衆を見ていないことが多い。	発表中に、聴衆を見ていないことが時々ある。	発表全体を通して、聴衆を見ている。
内　容	わかりやすい順序で内容が構成されておらず、聞き手が理解に苦しむ。ポイントが不明瞭である。	内容の順序については、改善の余地が若干あり、聞き手が理解しにくい部分がある。ポイントもやや不明瞭である。	わかりやすい順序で内容が構成されており、聞き手が理解しやすい。ポイントも強調されている。
熱　意	やる気が表現されていない。淡々と発表をこなしているように見える。	やる気がないわけではないが、人を動かすほどの熱意にまでは表現されていない。	やる気、人を動かす熱意も十分表現されている。
チームワーク	メンバー間でのコミュニケーションがとれておらず一人に任せきりにしている、もしくは一人が勝手に発表を進めているように見える。	メンバー間でのコミュニケーションがまあまあとれており、協力して発表を進めているように見える。発表に対する熱意が感じられないメンバーがいる。	メンバー間でのコミュニケーションが十分にとれており、協力して発表を進めているように見える。発表に対するメンバー全員の熱意が感じられる。
質疑応答	質問を正確に理解していないために、応答が的を射ていない。応答が攻撃的であり、質問者や聞き手に不愉快な思いをさせている。	質問を正確に理解しているが、応答が的を射ていない。応答は誠意を持ったものになっており、やりとりが建設的である。	質問を正確に理解しており、応答が的を射ている。応答は誠意のあるものになっており、やりとりが建設的である。
発表時間	発表時間は規定時間を過ぎた。もしくは大幅に早い時間で終了した。	発表時間は、規定時間内であったが、若干早い時間で終了した。	発表時間は、規定時間内であり、ぎりぎりまで有効に時間を使っていた。

佐藤（2010），p.136

レポートのルーブリックシート

	優秀	基準を満たしている	あと少しで基準を満たす	不可
創造性と独創性	洞察が独創的である，あるいは，特に，人を引きつけるものがあり，この課題の基準を超えている。	課題の基準をすべて満たしている。	課題の基準をほとんど満たしている。	課題の基準を満たしていない。
議論の質	中心的議論が明確で，興味深く，実証可能である（すなわち，単なる意見ではなく証拠に基づいている）。 レポートの主張は明確に中心的議論に沿ったものである。 この科目の重要な考えを細部にわたりしっかり理解していることが議論と主張に表れている。	中心的議論が明確で実証可能である。 レポートの主張は中心的論証に沿ったものである。この科目の重要な考えをしっかり理解していることが議論と主張に表れている。	中心的議論は実証可能であるが，明確ではないところがある。 レポートの主張の中に，中心的議論に明白に沿っていないところがわずかにある。 この科目の重要な考えをある程度理解していることが議論と主張に表れている。	中心的議論が不明瞭である，あるいは実証できない レポートの主張は中心的議論に沿っていない。この科目の重要な考えをあまり理解していないことが議論と主張に表れている。
証　拠	用いられている証拠が具体的で，内容が濃く，多様であり，主張を明確に裏づけている。 引用と図版が効果的に組み立てられ，本文中で適切に説明されている。	用いられている証拠は主張を裏づけている。 引用と図版がある程度効果的に組み立てられ，本文中で適切に説明されている。	用いられている証拠には主張の裏づけになっていない部分がある。 引用と図版の中に，組み立てが効果的ではない，あるいは本文中で適切に説明されていないものがある。	用いられている証拠がほとんど主張の裏づけになっていない。 引用と例示のほとんどが，組み立てが効果的ではない，あるいは本文中で適切に説明されていない。
構　造	読者を導く強力なトピックセンテンスがあり，考えに終始一貫性があり論理的に提示されている。 読者は議論の構造を非常に容易に理解することができる。	読者は議論の構造を少し努力すれば理解することができる。	読者は議論の構造を常に理解できるわけではない。	読者は議論の構造を理解できない。
明瞭さ	文章が簡潔で非常によく練られており，語彙が正確であるため，読者は非常に容易に意味を読み取ることができる。	読者は少しの努力で意味を読み取ることができる。	読者は常に容易に意味を読み取ることができるわけではない。	読者は容易に意味を読み取ることができない。
技　巧	綴り，句読点，文法の目立った間違いが全くなく，引用文がすべて正しく引用されている。	綴り，句読点，文法の目立った間違いが少なく，引用文がすべて正しく引用されている。	綴り，句読点，文法の目立つ間違いがあり，一部の引用文が正しく引用されていないことがある。	綴り，句読点，文法の重大な目立った間違いがあり，引用文が正しく引用されていない。

出典：Eberly Center for Teaching Excellence, Carnegie Mellon University.

スーザンA. アンブローズ 他著（栗田佳代子監訳）（2014），pp.226-227

実験レポートのルーブリックシート

	模範的	有能	努力を期待
材料・器具	必要な物品がすべてそろっており、それらが漏れなく実験レポートに記録された。用意された物品は実験で使用するのに適切なものである。学生は物品を無駄に使用することはなかった。	必要な物品はすべてそろっていたが、実験レポートに記録されていない品目がある。あるいは一部の物品が用意されておらず、実験中に調達した。用意された物品は実験で使用するのに適切なものである。	必要な物品の一部が準備されていなかったり、実験レポートへの記載漏れがあったりした。用意された物品は実験で使用するのに適切とはいえない。あるいは重大な欠落がある。
実験手順	実験手順はよく練られたもので、選択されたすべての変数について対照実験を行った。実験手順のすべての段階が実験レポートに記載されている。	実験手順には改善の余地があるが、選択されたすべての変数について対照実験を行った。実験手順のほとんどの段階が実験レポートに記載されている。	実験手順は、選択されたすべての変数につき、対照実験を行うものではない。実験手順のうち、多くの段階が実験レポートに記載されていない。
礼儀・安全	学生は整然と実験を進行し、周囲への気配りを怠らなかった。安全にも配慮し、後片付けや清掃をしっかり行った。	学生は概して整然と実験を進行した。十分でないにせよ、周囲への気配りや安全への配慮があった。指摘を受けると、後片付けや清掃をしっかり行った。	学生は雑然と実験を行い、周囲への気配りや安全への配慮がなかった。後片付けや清掃は指摘されても十分に行わなかった。
実験目的	研究課題と仮説が明確に述べられ、両者の関係が明白である。変数が選択されている。	研究課題と仮説が述べられているが、そのいずれかまたは両方が不明確である。あるいは両者の関係が不明確である。変数が選択されている。	研究課題と仮説が明確に述べられていない。両者の関係は不明確または欠如している。変数が選択されていない。
データ収集	未加工データが単位とともに適切な方法で明確に記録されている。データ表には表題が付けられている。	未加工データが単位とともに記録されているが、適切さや明確さに問題がある。データ表には表題がつけられている。	単位を含め、未加工データの記録は不適切あるいは不明確である。データ表には表題が付けられていない。
データ分析	データは図表やグラフ等で提示され、理解や解釈が容易になるよう工夫されていた。エラー分析がなされている。	データは図表やグラフ等で提示された。その理解や解釈は可能であったが改善の余地がある。エラー分析がなされている。	図表やグラフ等によるデータの提示は非常に不明確であった。エラー分析はなされていない。
実験の評価	実験結果は完璧に分析・解釈され、文献値とも照合されている。この方法による限界や弱点が考察され、改良方法について提案がなされている。	実験結果は分析・解釈され、文献値とも照合されているが、改善の余地がある。この方法による限界や弱点が考察されているものの、改良方法について提案はほとんどあるいは全くない。	実験結果の論理的な分析・解釈が行われていない。あるいは文献値と照合されていない。この方法による限界や弱点の考察はなく、改良方法についても何ら提案されていない。

ダネル・スティーブンス，アントニア・レビ著（佐藤浩章監訳）（2014），p.100

●ラーニング・ポートフォリオ

土持（2011）は、「ラーニング・ポートフォリオは、下記の図5-35『ラーニング・ポートフォリオ・モデル』のように、『省察＋証拠資料＋共同作業＝学習』の一連の作業を文章化したものである」（p.81）とし、ラーニング・ポートフォリオの3つの要素（リフレクション、ドキュメンテーション、コラボレーション（この中にメンターリングが含まれます）を示しています（p.70）。

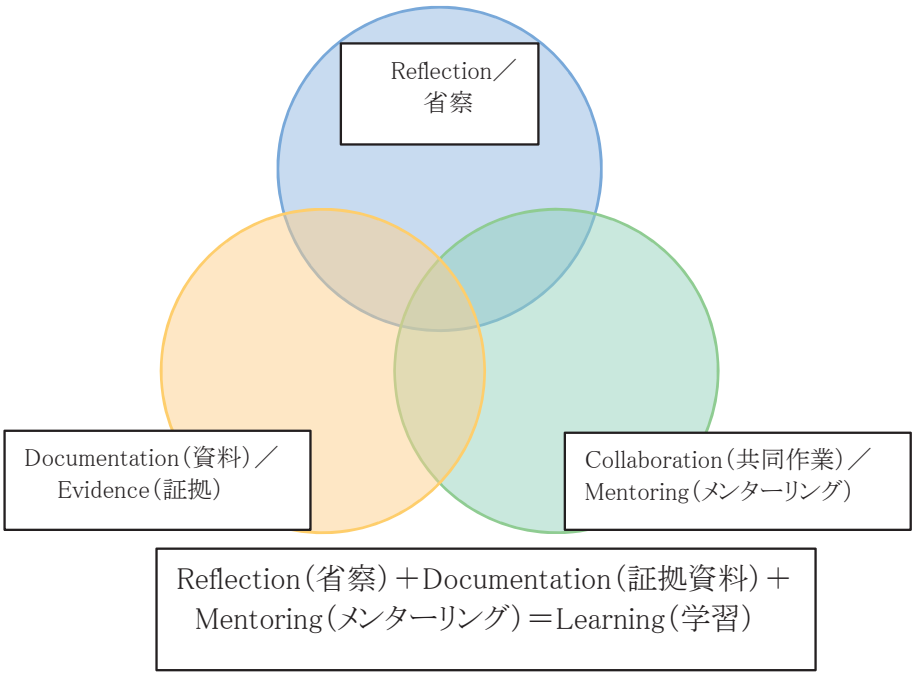


図5-35　ラーニング・ポートフォリオのモデル

出典：John Zubizarreta, The Learning Portfolio: Reflective Practice for Improving Students Learning Second Edition (San Francisco: Jossey-Bass, 2009), p.25

土持ゲーリー法一（2011），p.81

また、土持（2011）は、「ラーニング・ポートフォリオを読めば、その中に授業のすべてが凝縮されている。学生の学習成果（ラーニング・アウトカム）はもちろん、教員の授業改善に繋がるヒントが多く含まれる。」（はじめにⅲ）と説明しています。

【参考文献】

ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ 著（佐藤浩章監訳）（2014）『大学教員のためのルーブリック評価入門』、玉川大学出版部。

土持ゲーリー法一（2011）『ポートフォリオが日本の大学を変える』、東信堂。

中井俊樹 編著（2015）『アクティブラーニング』、玉川大学出版部。

松下佳代（2015）「序章　ディープ・アクティブラーニングへの誘い」、松下佳代 編著『ディープ・アクティブラーニング』、勁草書房、pp.1-27。

溝上慎一（2015）「第1章　アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」、松下佳代 編著『ディープ・アクティブラーニング』、勁草書房、pp.31-51。

佐藤浩章 編（2010）『大学教員のための授業方法とデザイン』、玉川大学出版部。

スーザンA. アンブローズ 他著（栗田佳代子監訳）（2014）『大学における「学びの場」づくり—よりよいティーチングのための7つの原理』、玉川大学出版部。

学習支援・教育開発センターでは、今回参考文献としてとりあげた書籍以外にも、FDに関する書籍や雑誌、機関紙、報告書等も収集しています。所蔵している書籍等は、学習支援・教育開発センターのHPでも紹介していますので、ご確認ください。

参考URL

●学習支援･教育開発センターホームページ【図書資料のご案内】
http://clf.doshisha.ac.jp/books/list.html

刊行物のご案内

学習支援・教育開発センター年報

学習支援・教育開発センターでは、高等教育に関する学術的および実践的研究を促進することを目的として、2010年度より『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』を発行しています。前年度のセンター活動報告に加えて、本学教職員（非常勤を含む）、大学院生等を対象に募集した原稿の中から、高等教育およびその関連領域に関する研究論文、実践報告、活動報告、文献紹介等を掲載しています。なお、本誌は、本学学術リポジトリにも掲載されます。

CLF report

学習支援・教育開発センターでは、センターの活動を学内外に知ってもらうため、2004年度より『CLF report（同志社大学学習支援・教育開発センターレポート）』を年2回発行しています。部会の活動報告のほか、ラーニング・コモンズ運営状況、各学部・研究科・センターにおけるFD活動報告等を掲載しています。

バックナンバーについては、学習支援・教育開発センターのホームページで公開しています。

※センターの名称変更に伴い、vol.17（2012年10月発行）より「CFD report」から「CLF report」に改称しました。

参考URL

●同志社大学学術リポジトリ
http://library.doshisha.ac.jp/ir/
●学習支援･教育開発センターホームページ【CLF report】
http://clf.doshisha.ac.jp/clf_report/latest.html

同志社大学FDハンドブック
●2016年3月発行
●発行者：同志社大学学習支援・教育開発センター
〒602-8580　京都市上京区今出川通烏丸東入
http://clf.doshisha.ac.jp/

140th Anniversary
DOSHISHA UNIVERSITY since 1875

DOSHISHA UNIVERSITY MDCCCLXXV KYOTO
VERITAS LIBERABIT VOS